長野県埋蔵文化財センター年報 15

1998

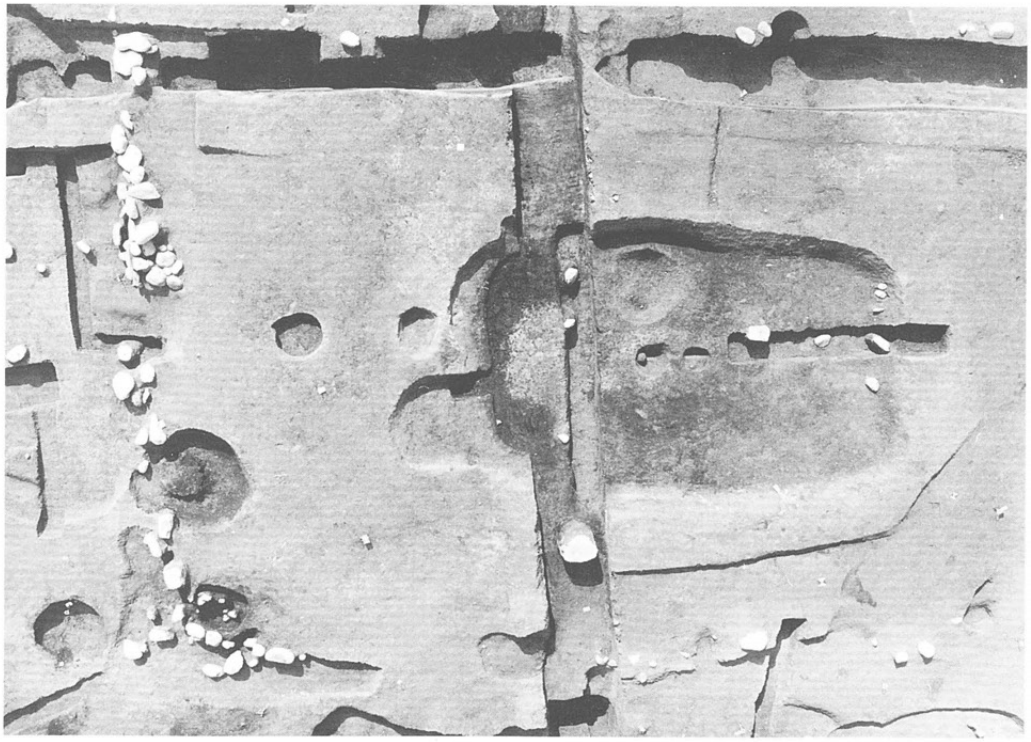
財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報15

1 9 9 8

財団法人長野県文化振興事業団
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

聖石遺跡　全景



山の神遺跡　列石と竪穴住居

序

本年度は行政改革の一環として大幅な組織改正が行われ、これまで独立した財団法人であった長野県埋蔵文化財センターは、㈶長野県文化振興事業団の傘下に加わることになりました。それに伴い、上田・長野の二事務所体制を廃止して一本化し、高速道路関連の整理作業を中心にして、新たな発掘を加え、事業を推進して参りました。

本年度は、県営圃場整備事業に関連した聖石遺跡、県単農道整備事業に関連した駒込遺跡、国営アルプスあづみの公園に関連した山の神遺跡を調査しました。聖石遺跡では縄文時代中期後半の環状集落を丸ごと調査し、、山の神遺跡は縄文時代早期押型文期の竪穴住居を中心とする集落を本格的に調査しました。得られた資料は絶好で、新聞等にも報道され、注目を集めました。

高速道路関連の整理・報告書刊行作業はピークを迎え、上信越自動車道関連の佐久市・小諸市・東部町・上田市・坂城町内のほとんどの遺跡、長野市松原遺跡の弥生時代編の一部や村東山手遺跡・小滝遺跡等・榎田遺跡、更埴市屋代遺跡の古代編などの報告書を刊行致しました。また、高速道路関連残りの遺跡につきましても、平成11年度を目標に報告書を刊行させるべく、作業を進行させて参りました。

普及・公開活動と致しましては、速報展「発掘された大昔の暮らし」を、長野県民文化会館で開催しました。

本書は平成10年度に当センターが実施した事業の概要をまとめたものです。ご参考となれば望外の喜びです。

日頃より当センターの事業にご協力・ご指導いただいている関係各位にお礼申し上げるとともに、一層のご支援をお願いする次第です。

平成11年３月

長野県埋蔵文化財センター

所長　佐久間　鉄四郎

目　次

口絵写真
聖石遺跡全景（上）
山の神遺跡列石と竪穴住居（下）

序
目次

Ⅰ、発掘調査及び整理作業の概要……1
1、聖石遺跡……2
2、駒込遺跡……6
3、山の神遺跡……7
4、宮ノ反Ａ遺跡群ほか……11
5、芝宮遺跡群ほか……12
6、郷土遺跡ほか……13
7、中原遺跡群・真行寺遺跡群ほか……14
8、大日ノ木遺跡ほか……15
9、屋代遺跡群・更埴条里遺跡……16
10、松原遺跡……18
11、村東山手遺跡……20
12、小滝遺跡・北之脇遺跡・前山田遺跡…21
13、春山Ｂ遺跡……22
14、川田条里遺跡……23
15、榎田遺跡……24
16、日向林Ｂ遺跡・貫ノ木遺跡ほか……26
17、屋代遺跡群国道403号バイパス地点 ……28
Ⅱ、普及・公開活動の概要
1、現地説明会……29
2、企画展……29
3、指導・研究会・学習会……30
4、刊行物……30
Ⅲ、機構・事業の概要
1、機構……31
2、事業……31
平成10年度役員及び職員……35

Ⅰ　発掘調査及び整理作業の概要

平成10年度の発掘調査は、県営圃場整備事業関連・農道整備事業関連・国営公園関連の諸遺跡を対象にした。整理作業は上信越自動車道関連・国道バイパス関連遺跡を対象とした。概要を以下の一覧表に示す。

(1)　発掘調査

県営圃場整備事業・国道付替事業関連

農道整備事業関連

国営アルプスあづみの公園関連

所在地	遺跡名	調査対象面積 m²	契約面積 m²	調査面	調査延面積 m²	調査期間	調査員数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以降調査面積 m²
茅野市	聖　石	15,600	15,600	2	20,000	10・4・9 ～11・1・14	3	完了	縄文時代環状集落	縄文土器・石器、土偶、翡翠製垂飾等	0
浅科村	駒　込	6,000	3,000	1	3,000	4・27 ～6・30	2	継続	平安時代竪穴住居、掘立建物、近世井戸等	古代中世の土器等	3,000
大町市	山ノ神	35,950	4,300	4	8,000	7・1 ～12・4	2	継続	縄文時代竪穴住居、集石炉、土坑等	縄文土器、フレイク石器等	未定

発掘調査３遺跡のうち、山の神遺跡のみ昨年度以来の継続調査である。本年度は遺跡の中心部分に遭遇し、昨年度とは桁違いに充実した調査となった。駒込遺跡は住宅の撤去問題があり、２年次に分割して調査することになった。遺跡の中心は来年度調査予定地だと推測される。聖石遺跡は圃場整備事業に関連するが、これは当センターにとって初めての事業で、同一の遺跡ながら三者から委託を受けて実施した。縄文時代中期の環状集落を丸ごと調査することとなり、遺跡の規模の大きさと密度の濃さに苦慮し、１月までかかってようやく終了することができた。

(2)　整理作業

事業別	所在地	遺跡名	作業内容
上信越自動車道	佐久市・小諸市・東部町 上田市・坂城町・更埴市 長野市	芝宮・中原・中田・真行寺ほか 陣馬塚・宮平・東平ほか、更埴条里・屋代の一部 松原の一部・村東山手・小滝等・榎田	図版作成・報告書刊行
	更埴市 長野市・信濃町	更埴条里・屋代ほか 松原・川田条里・日向林Ｂ・貫ノ木・東裏ほか	接合・実測・図版作成
国道バイパス	更埴市	屋代・大境	接合・実測・図版作成

高速道路間連の諸遺跡は、郷土遺跡、屋代遺跡の一部、松原遺跡の一部、川田条里遺跡、春山Ｂ遺跡、信濃町の諸遺跡を除いたすべての報告書を刊行した。残りの遺跡も11年度刊行を目指して整理作業を進行させた。また、国道 403号線バイパス関連の屋代・大境遺跡は原稿まで完成させ、印刷・刊行だけを来年度に持ち越した。

1　聖石遺跡（県営圃場整備事業・国道299号線付け替え事業関連）

所　在　地：茅野市北山芹ケ沢聖石7634－イ－１ほか　　調査担当者：柳澤亮・臼居直之
調査期間：平成10年４月13日～11年１月14日　　臼田広之
調査面積：15,600㎡
遺跡の立地：八ヶ岳の裾野、渋川に沿う東西に長い細尾根状の台地上部とその南側の沢に面する斜面。標高1,038～1,048ｍ。
遺跡の特徴：縄文時代中期～後期の集落

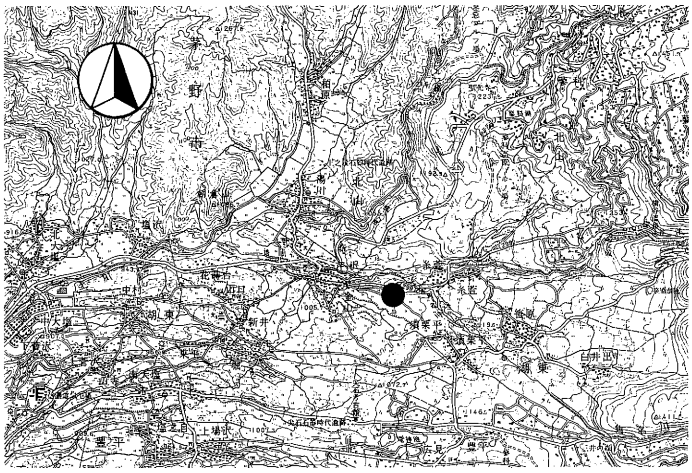
検出遺構（11年３月現在の確定数）

遺構名	数	備　　考
竪穴住居跡	89	敷石住居跡９軒含む
土坑	約2000	墓壙、方形柱穴列など含む
焼土跡	30	炉跡含む
遺物集中	18	
溝跡	4	近現代
不明遺構	25	屋外埋設土器含む

出土遺物
土　　器：縄文時代中期・後期土器
石　　器：石鏃、石錐、石匙、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲き石、石皿、台石、黒曜石石核
土 製 品：土偶、土器片板
石 製 品：石棒、翡翠製垂飾
骨角製品：管状垂飾

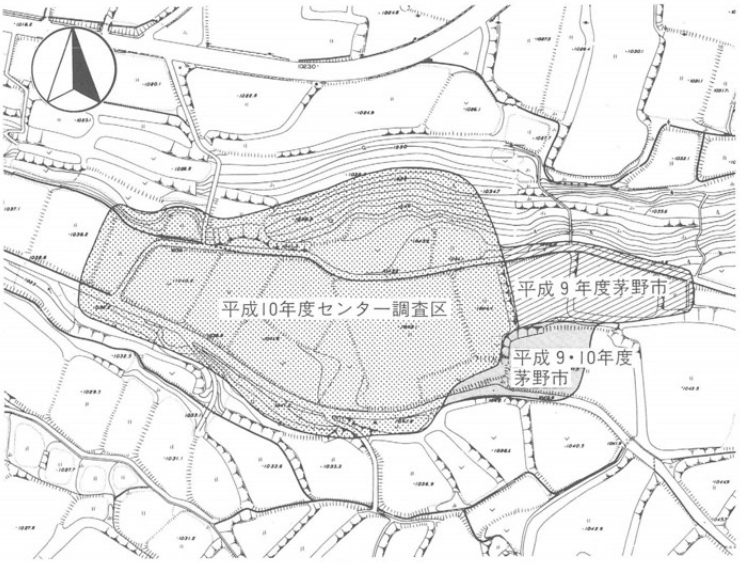
調査の経過　聖石遺跡の名は、古くから畑の中にあったという安山岩の巨礫「ヒジリ石」に由来する。当地は以前より石鏃などが拾えることで有名で、昭和40年前後の開田工事では多くの縄文土器や石器が出土したという。因みに聖石遺跡と同じ台地の上方100ｍ、標高1,070ｍの地点には縄文時代中期の遺跡として著名な長峯遺跡がある。

今回の圃場整備に伴う発掘調査は、茅野市教育委員会によって平成９年度から開始された。９年度には台地上の東地区が終了し、敷石住居跡が濃密に重複する南斜面地区は、平成10年度まで継続調査となった。当センターは10年度より、台地上部を中心とする地区、15,600㎡の調査を担当した（第２図）。

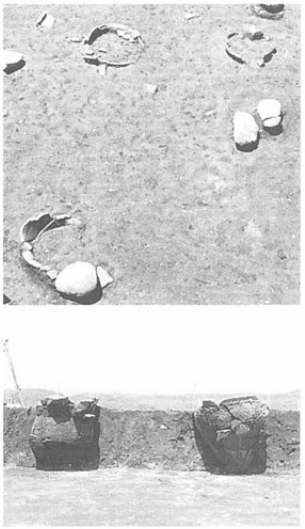


第１図　聖石遺跡位置図（１：100,000）

地区内は茅野市教育委員会の試掘成果に基づき全面調査を行った。その大半は同一検出面による調査であったが、一部旧地形の残る箇所では縄文後期面と中期面の２面調査を実施した。調査は工事工程と調整しながら進めて、調査期間中に西側地区の一部を都合２回明け渡し、平成11年１月に全て終了した。以下に時代毎の調査概況を記す。



第２図　調査範囲図（Ｉ：4,000）



第３図　屋外埋設土器
（下：断面）

旧石器時代　９年度の市の調査では、旧石器時代に属する石器が出土しているが、今年の調査では見つかっていない。一部で遺構検出面に当たるⅣ層上面以下（Ⅳ層は主にローム主体層、下部Ⅴ層は巨礫を含む堅固な砂礫層）にトレンチ調査を実施したが、成果は挙がっていない。

縄文時代中期初頭　明らかな遺構が残るのは中期初頭からである。しかし未だここに集落を営んではいないようで、調査区西端に九兵衛尾根式土器を一括廃棄した浅い円形の土坑１基が確認されているのみである。

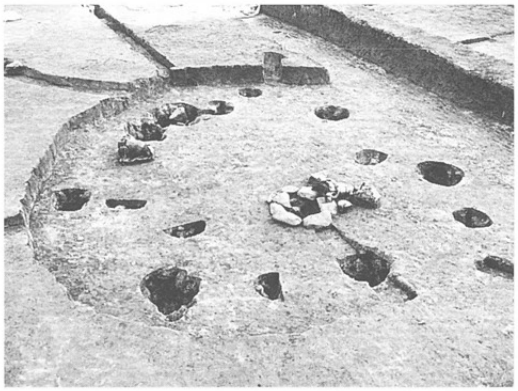
縄文時代中期後葉　この時期に初めて集落が形成される。集落は土器型式でいう曽利１～５式期、更に最終的には後期堀之内２式期まで繋がっている。

中期の集落形態を概観すると、台地の最大幅（80ｍ程度）部分には環状集落が形成されている。直径10ｍ程の遺構の空白域（中央広場）を囲むように、その外縁直径50ｍ程の範囲内に1,800基を越える土坑群、最外縁に竪穴住居群が配置される。

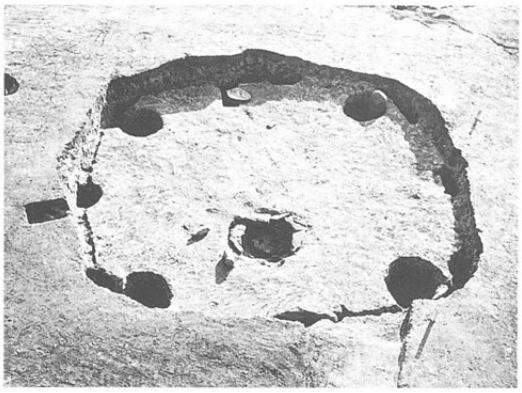
竪穴住居は２年間で84軒を調査した。ただし、この数値は完全ではなく、今後の整理作業による増加と、削平部分の分布推定を加味すれば、遺跡全体では100軒前後になるだろう。

分布は単に環状ではなく、西は環状範囲から南向き斜面（台地下方）まで塊状に範囲を延ばし、東は台地幅の狭まる部分（台地上方）にも数軒の住居が確認されている（平成９年度茅野市調査）。東西最端の住居間を測れば200ｍと集落規模は長大になるが、各住居の存続時期は今後の課題であり、従って各期の集落規模の変容は未だ把握できていない。ただ調査の所見ではおおむね前半（曽利１～３式期）は環状配置であったものが、後半（曽利４～５式期）になって東西まで配置範囲を広げていったと言えそうである。

住居構造自体も前半と後半では変化が認められる。前半の住居は円形プラン、円形配置の柱穴で、やや奥壁寄りに平面楕円形で転石利用の浅い石囲炉を持つタイプが多く（第４・６図）、後半の住居は方形または五角形に近いプランで４本の主柱穴を持ち、いっそう奥壁寄りに方形

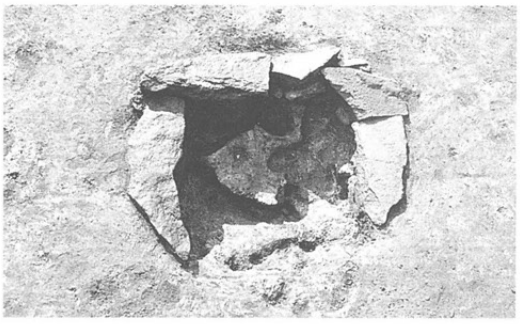


第４図　ＳＢ09住居跡（北より）



第５図　ＳＢ37住居跡（北より）

第６図　ＳＢ09　炉



第７図　ＳＢ37　炉

で角礫利用の大きく深い石組炉を設けるタイプが増加する（第５・７図）。また石棒を炉奥に埋置したり縁石へ転用する例や、副炉を持つ例、炉縁に小形土器を埋置する例、柱穴際に立石を配する例（第５図）などが見られる。入口部の埋設土器も一般的となり、複数の埋設土器を持つ例もある。土器は底部が欠損し、正位も逆位もあり、石で蓋をすることもある。

土坑は、総数2,000基以上あり、その性格は多様である。まず環状配置内では、径１ｍ程の円形や楕円形でそれ程深くなく、翡翠製垂飾や完形土器などを持つ土坑は墓と推測され、中央広場に近い最も内縁に配置される傾向がある。また径は１ｍ弱だが、１ｍ以上の深さがあり、柱痕跡も確認される土坑は建物跡の柱穴の可能性が高い。今のところ１間×１間、１間×２間の方形柱穴列が10基以上、半円形に配列される柱穴列も２基確認され、この数値は今後の検討で更に増加するだろう。こうした柱穴群は墓と重複しつつもその外側に配置される傾向があり、かつ環の南北側には存在しないようである。その代わり南北側には径40㎝以下の小規模な土坑が密集するが、その性格は即断できない。

他に台地外縁には貯蔵を目的とした大小のフラスコ状土坑や陥穴などが分布する。フラスコ状土坑は中期～後期に属し、陥穴は遺物がなく、所属時期の特定は難しい。

屋外の埋設土器は２～４基がまとまった状態で数群検出されている（第３図）。その位置は環状配置の住居群のごく内縁に隣接するという点で共通する。いずれも比較的大形の深鉢形土器を用い、正位で底部が残っていることが多い。

また台地北斜面にある３カ所の微小な谷頭は、その堆積土中に土器片や石器が多量に包含されることから、当時のゴミ捨場と推定される。なおこの調査のため、部分的に台地平坦面より４ｍ下まで調査範囲を拡大した。

縄文時代後期　集落は中期後葉より後期の称名寺式、堀之内１・２式期まで続く。しかしその住居配置は台地上から、次第に南斜面（茅野市調査地区）とその周辺部分へと移行していく。

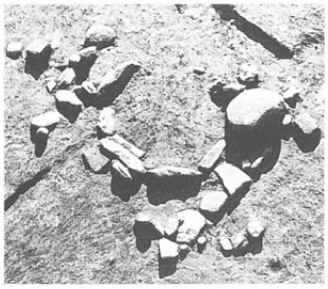
後期の遺構では敷石住居跡或いは配石遺構、土坑が挙げられるが、いずれも中期遺構より後世の耕作等の影響を強く受けていて、検出状況は良好ではない。

敷石住居跡はセンター調査地区では９軒を数える。所属時期は中期終末期（曽利５式期）から称名寺式期、堀之内１式期に属すると思われる。なおこの数値や時期は、今後、覆土内の土器の検討や、配石遺構の住居登録化などの作業で修正されていくものである。

このうち最も良好なＳＢ75住居は、市調査地区の「造成」された敷石住居群を見下ろす南斜面直上に位置する。南東部に残存する敷石は主に板状節理の安山岩を用い、その形状から、敷石の全体形は八角形を推定する(第８図)。炉は主体部中央に位置し、八角形に並べた細長い円礫を更に円礫で方形に囲むようである(第10図)。炉火床部には鉢形土器が埋置されている。主柱穴は９基で入口部と思われる南側の２基は隣接して並ぶ(第９図)。主柱穴間は浅い周溝で結ばれ、主柱穴外周には主柱穴間毎に２～３基の支柱穴が円形に巡る。住居の全体形は、南側の地形が後世に低く改変されていて摑めないが、主体部は円形の掘り込みといえる。規模は主柱穴の柱痕間で東西740㎝、主柱穴規模は最大で径90㎝、深さ154㎝を測り(第11図)、大形住居の部類に入る。なお炉体土器やピット内一括出土の土器から所属時期は堀之内１式期といえる。

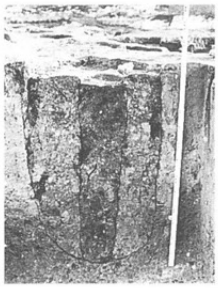
今後の課題　２か年の調査は台地全面に及び、削平部分以外は凡そ集落の全体像を把握し切ったといえる。これから膨大な遺構の時期や性格付けを行い、各期の集落構成を捉え、その変容を纏めることによって、当該期の一標式となるような集落遺跡としたい。

第８図　ＳＢ75　敷石状況（北より）



第10図　ＳＢ75　炉

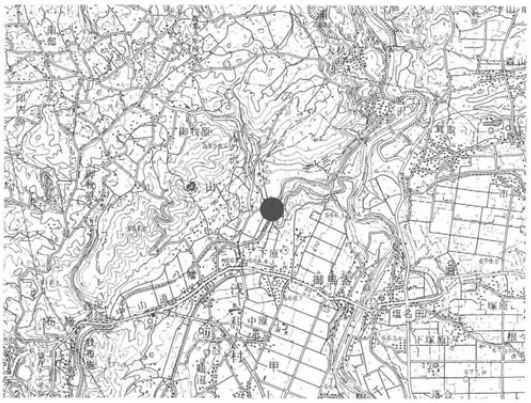
第９図　ＳＢ75　主柱穴配置（北より）



第11図　主柱穴断面

2　駒込遺跡（県単農道整備事業関連）

所　在　地：北佐久郡浅科村桑山
調査担当者：上田　真、石原州一
調 査 期 間：平成10年４月27日～６月30日
調 査 面 積：3,000㎡
遺跡の立地：丘陵地
検 出 遺 構：竪穴住居跡２、掘立柱建物10、土坑800、井戸１他
出 土 遺 物：縄文土器、土師器、須恵器、内耳土器、陶磁器、中国銭他

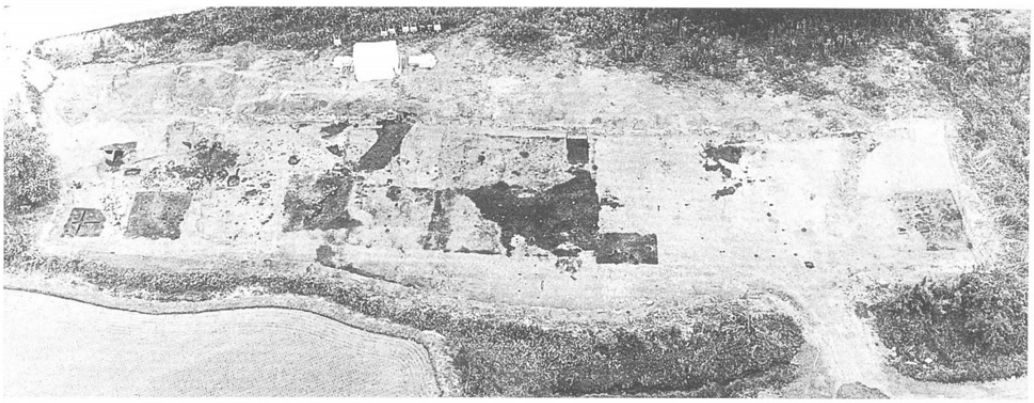


第12図　駒込遺跡位置図（１：100,000）

遺跡は千曲川の支流の布施川に面する丘陵上に立地し、北西から南東にむかって傾斜している。現地目は畑で、暗渠排水が縦横に走っていた。

調査区内の層位は上から現耕作土、黒褐色土、茶褐色土、山砂の順で、遺構は３層目の褐色土上面、４層目の山砂の上面で検出された。主な遺構は、平安時代の竪穴住居跡２軒、中世の掘立柱建物約10軒、土坑約800基、近世の石組の井戸１基などで、このうち竪穴住居跡は斜面の上部、調査区北東部で検出されているが、削平が著しく壁溝の一部を検出するにとどまった。掘立柱建物跡は土坑の対応関係の検討が進んでおらず、今後増減するかもしれない。多数検出された土坑は墓坑の可能性を持つ1.5×1.0ｍ程度の長方形のもの10基を含むが、大部分は15～50cm程度と小形である。多くは中世に属するだろうが、須恵器蓋の完形品や1068～1094年初鋳の宋銭３枚が出土した土坑などは平安時代に遡ると思われる。

主な出土遺物は、縄文土器、石器、土師器、須恵器、内耳土器、陶磁器、中国銭などで、表土中や土坑内から出土するが小片のうえ量も少なく、前述の須恵器蓋を除いて復元できそうなものはない。特に縄文時代の遺物の出土は調査区西端付近の遺構外に限られ、来年度調査予定の調査区西側にこの時代の遺構が存在する可能性が高い。



第13図　調査区全景

3　山の神遺跡（アルプスあづみの公園関連）

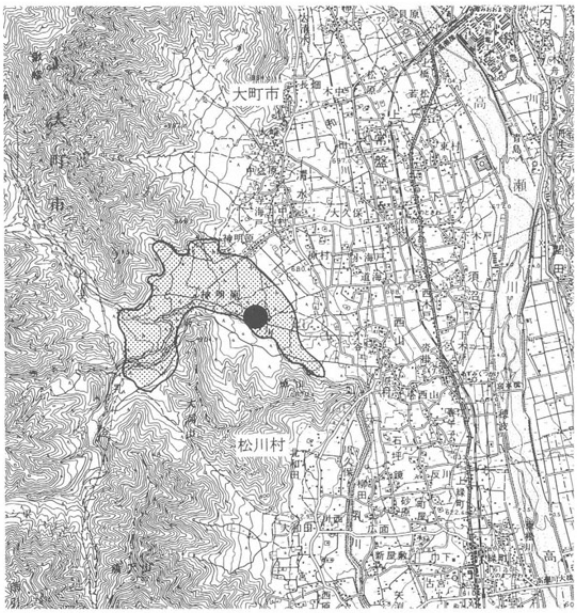
所　在　地：大町市常盤　　調査担当者：石原州一、上田 真

調 査 期 間：平成10年7月13日～12月4日　　調 査 面 積：4,300㎡

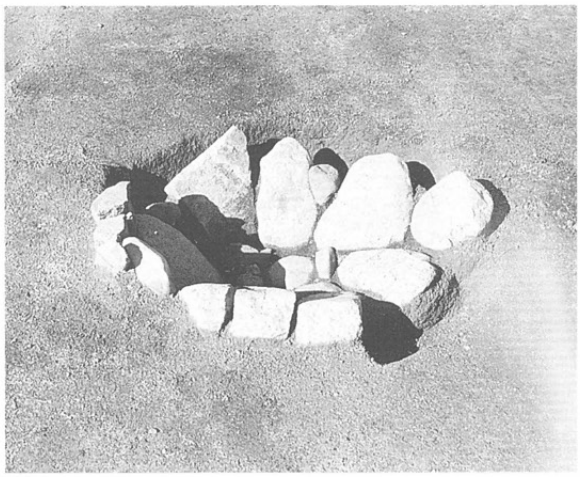
遺跡の立地：乳川扇状地の扇頂付近～扇央部

検 出 遺 構：縄文時代早期　竪穴住居跡11棟、集石遺構44基、列石３基、土坑約80基、焼土跡18基

出 土 遺 物：縄文時代早期　土器、石器（異形部分磨製石器、掻器、削器、石鏃、石錐、特殊磨石、磨製石斧、敲石など）

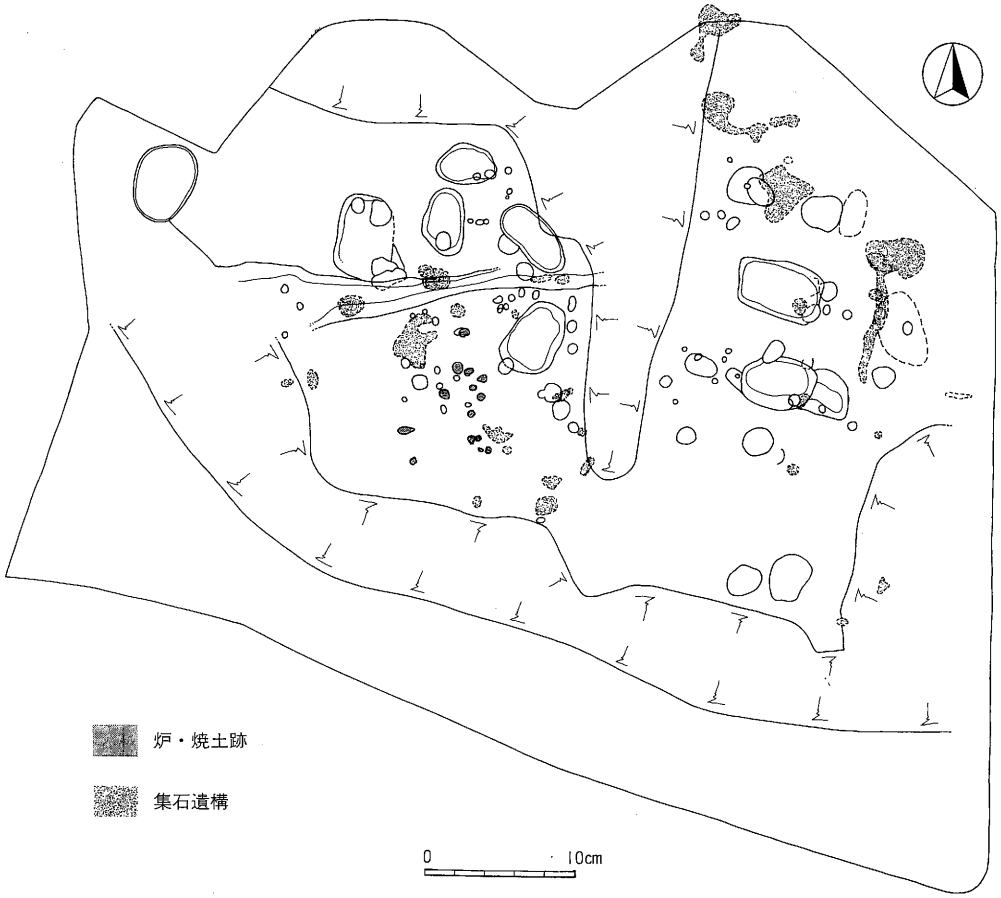


第14図　山の神遺跡位置図（１：100,000）



第15図　集石炉

調査２年目の本年度は、昨年度からの継続範囲を中心に西方と北方に調査区を大きく拡大して実施した。その結果調査区の地形をほぼ把握することができた。小さな流れによる浸食の跡が複雑に入り組むが、大観すると中央部からやや北よりに微高地が尾根状に残され、その南側と北側は西から流下する浅い谷によって削られていた。そのため堆積の状態は、谷部分と微高地部分では大きく異なり、昨年度報告した調査区南端の土層は谷を埋めた土層の状態を示すものである事が明らかになった。遺構の集中する微高地では表土直下より黒褐色土（ａ層とする）、黄褐色土（ｂ層とする）が繰り返し堆積した様子が観察され、最も堆積の厚く残った部分で上部よりⅠ層(表土)、Ⅱ層（Ⅱａ層＝黒褐色土・Ⅱｂ層＝黄褐色土)、Ⅲ層（Ⅲａ層・Ⅲｂ層)、Ⅳ層（Ⅳａ層・Ⅳｂ層）と大きく４分層する事ができる。これら黒褐色土、黄褐色土ともに良好な包含層であるがⅣｂ層は白黄褐色土層となり無遺物層（地山）である。しかしこの微高地内にですら泥流（土石流）の跡と思われる部分が観察され、すべての区域を同じ層位で括りきれない困難が伴う。



第16図　山の神遺跡　遺構配置図（1：500）

本年度の調査は微高地部分が中心となり遺構数は著しく増加した。竪穴住居跡はIII層とIV層で11軒を検出した。平面形は長円形6軒、隅丸方形2軒、切りあいにより形態が不明のもの1軒、調査未了2軒である。おのおの長径は4.2mから5.7m、短径は2.5mから4.0mである。壁の立ち上がりは比較的明瞭であった。また柱穴は1軒で、住居内の炉は2軒で検出できた。本年度III層面で調査が中断した地区ではトレンチ観察で更に何軒かの存在が確認されており、住居域は調査区の東側に広がることが予想される。

集石は昨年調査分を含め44基を検出した。このほかに列状に石を並べた遺構が3基検出された。集石の形態はさまざまで、昨年度より見られる熱を受けた礫が浅い土坑にほぼ円形に集められたもの、石組み炉ともいえる構造を持つ集石炉、小礫を斜面に敷き詰めたもの、礫を集めたものなどがあり、他地域での類例を調べ慎重に検討を進めたい。集石炉は8基を検出した。底部には平石を敷くか小礫を敷き詰め、また側面も貼り付けられた石が直立する形態と大きめの石がやや斜めに開く形態がある。どの形態も遺存状態のよいものは貼り付けられた炉石の構造は堅固で、炉内に投入された礫との判別は容易につく。内部に拳大からやや大きめの礫を多

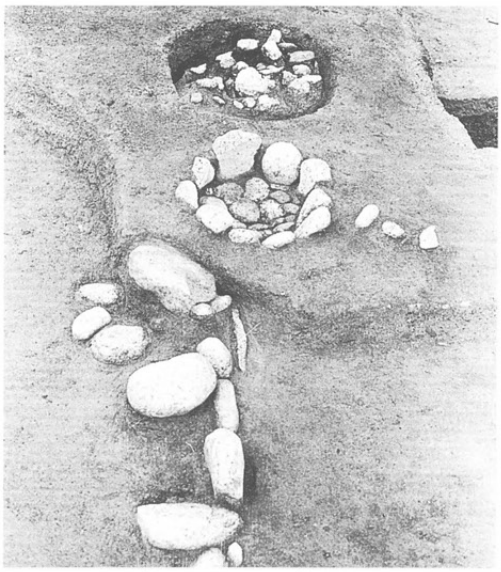
数投入した例が多いが、礫が投入されず拳大の礫が多数投入された土坑と並んだ例もある。集石炉は、直径40cm程度から最大で１ｍほどである。列石は大小３基を検出したが、最長の１基はほぼ直角に折れ曲がる形態をとる。規模は南北方向に約８ｍで、その北端が西の方向に２ｍ程曲がり、さらに延長すると推測される。これは集石遺構と重複しており、来年度に本格的な調査を実施の予定である。最小の列石は全長１ｍ程度で一列に小礫が並べられている。これら以外に小さな谷地形の縁に沿って小礫を並べたと思われる遺構が見られ、遺構かどうか判断に迷う。

土坑は大小約80基を検出した。最大は径が3.4ｍ×2.4ｍの長円形の平面形を持ち、深さ0.37cmで竪穴住居跡と類似する。また直径約２ｍ、深さ約１ｍのほぼ円形の土坑が２基検出されたが、これは貯蔵穴ではないかと思われる。これら以外に様々の形態を持つ土坑が見られるが今後その性格を検討したい。また焼土跡は18基を検出したが特定の形態はとらないようだ。

遺物は昨年度同様全域から出土し、種類・量ともに豊富である。ただし谷の部分では覆土の大半をなす黒褐色土にはほとんど見られず、谷底に堆積した黄褐色土中より多く出土する。またⅣｂ層（白黄褐色土層）は無遺物層で、いくつか２×２ｍのグリッドを設定し、深掘りをしたが遺物は検出されなかった。一方遺構の集中した微高地部分では各層位から多量に出土し、まとまって出土する個所も見られる。しかし竪穴住居跡内に遺物が集中する傾向はない。

昨年同様ホルンフェルスと言えるほど硬い頁岩の剥片類が主体で、黒曜石、チャートの剥片類の出土は大変少ない。また検出される原石・石核は頁岩で、これを用いて盛んに石器の製作がなされていたことが予想される。原石は東方６kmの高瀬川の河原で採集可能であるが量は多くない。主なツールは削器、掻器（頁岩、チャート）・鍬形鏃（チャート、頁岩、黒曜石）・石錐（頁岩）・異形部分磨製石器（チャート）・磨製石斧（蛇紋岩）・敲石（花崗岩、砂岩）・特殊

第17図　竪穴住居跡



第18図　列石と集石炉

磨石（花崗岩）・磨石（花崗岩、安山岩）などがある。中でも異形部分磨製石器（トロトロ石器）は総数で37点を数える。うち28点が集中出土した。石材は精選されたチャートを使用し表面は滑らかに磨かれている。大きさは４段階に分類できる。また磨製石斧は大中小の３本が敲石とともにまとまって出土した。刃部を磨いて鋭い刃がつけられている。特殊磨石の出土量は多く、石皿や台石と思われる扁平で大きな礫も見られる。

土器は細久保式を主体とする押型文土器が中心である。II層からIV層までで多量に出土する。また胎土に繊維を含むものが多い。文様は楕円文を中心に多彩で、異種文様を併用する例も多い。施文方法に変化は見られずほとんどが同じ時期に属すると思われる。竪穴住居跡より一個体分の押型文土器がつぶれた状態で出土し、ほぼ完形に復元できた。口径24cm、器高44cmの砲弾形をなし、頸部でややくびれ、口縁部に向かって若干開く細長い器形である。文様は山形文がほぼ全面に施文されるが、頸部に設けられた横位の空白帯には縦の沈線が平行に施文されている。押型文土器以外には沈線文土器、撚糸文土器、無文土器、縄文土器が出土している。沈線文土器には沈線と貝殻腹縁文を施文したものと、沈線とC字状の刺突文を施文したものが見られる。また撚糸文には細い原体と太い原体とが見られる。沈線文土器と撚糸文土器は調査区南部の谷底から出土する傾向が見られた。また縄文土器はほぼ全面に縄文を施しているものと思われるが、一部に沈線を用いて施文している。なお表裏縄文土器は見られない。

第19図　異形部分磨製石器出土状況

第20図　押型文土器出土状況

4　宮ノ反Ａ遺跡群ほか（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書17・整理作業）

担　当　者：宇賀神誠司

佐久インターチェンジ以北の対象遺跡の内、佐久市・小諸市境付近に分布する８遺跡を一括整理している。地理的には佐久盆地平野部の北端に位置する遺跡群で、古墳時代後期後半から平安時代前半の律令期型集落跡が中心となっている。これから北は、浅間火山帯の裾野地形となって縄文時代の遺跡が密集するようになる。

発掘調査は平成２年度から５年度にかけて断続的に行い、平成７年度から本格的な整理作業に着手している。ただし、８年度には急遽整理担当者が発掘調査に対応せざるをえなくなり、また９年度は年間をとおして北陸新幹線関連の報告書に対応することとなった。

平成８年度までは遺物の整理作業を中心にして行い、実測・トレース・写真撮影などがすべて終了し、版下に使用する個々の遺物図版はほぼ出揃ったことになる。平成10年度はいよいよ報告書刊行の年となり、遺構図版を整理し、トレースを進めながら版下を作成し、あわせて原稿を執筆した。

律令期型集落跡が主体となっているが、遺物は極めて貧弱であり、原稿では余りふれていない。明らかに７世紀を中心とした集落も多々認められるのだが、未だ時期尚早ですくなくとも25年程の単位で編年を組むようなことはしなかった。ただし、底部に回転篦削りが残る須恵器坏が出現する奈良時代中葉以後については少なからず編年を試みている。

遺構分布密度は決して良好ではなく、これについても残念ながらあまり傾向はつかめていない。ただし、方形に巡らされた区画溝を溝をもつ掘立柱建物跡群については、「尺」の問題からいくつかの問題を提起した。参照されたい。

第21図　宮ノ反Ａ遺跡群北端部の区画溝に囲まれた掘立柱建物群

5　芝宮遺跡群ほか（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書18・整理作業）

担　当　者：藤原直人

経過：遺跡群は佐久盆地の北部、佐久市と小諸市の境、浅間山の南斜面に広がる田切り地形の台地上にある。発掘調査は平成４年度から６年度にかけて行われ、平成７年度から整理作業を行っている。平成８年度は阪神大震災の復旧・復興のため整理担当者が派遣され、整理作業は１年間凍結となった。今年度は３年目である。検出された遺構は、芝宮遺跡群が竪穴住居跡245軒・掘立柱建物跡約90棟、中原遺跡群では竪穴住居跡140軒・掘立柱建物跡約90棟を数える。

これまでの整理作業は、平成７年度が図面の修正・遺物の接合、９年度は遺物の実測・トレース・写真撮影を主に行った。

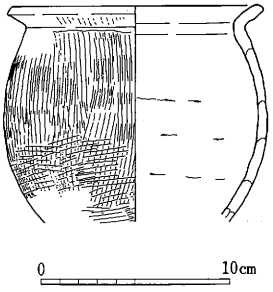
本年度の作業：土器の実測、遺構・遺物のトレース、遺構・遺物・写真図版の作成を行った。

中間報告：遺構の時期は、６世紀から10世紀まで継続する。遺物は６世紀代から見うけられ、集落としては６世紀後半に定着し始め、７・８・９世紀に急激に増幅したと捉えている。そして10世紀以降は徐々に規模は縮小し、11世紀には痕跡をとどめる程度で調査区域から消滅している。

佐久地方の該期の土器様相は在地色が弱く、６世紀は北信地方、同後半からは関東の主に上野、９世紀の後半には北信地方などたえず他地域の影響をうけ、出土する土器の主体はその様相を変えている。

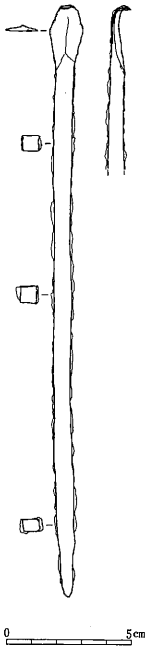
数量的には極めて少ないが、遠方との交流を示唆するような土器が見うけられたので報告する。

中原遺跡群の７世紀代の住居跡（ＳＢ302）から南伊勢系の可能性のある土師器の甕が出土していたことが、昨年度の整理作業において確認されている。本年度は、芝宮遺跡群の９世紀後半と考えられる住居跡（ＳＢ89）から出土した土師器甕（第22図）が、濃尾地方の甕と類似していることが判明した。口径10.6cm・残存高13.8cmを測り、器肉の薄い小型甕で、外面にはハケ目が施されている。また、内面には煮焦げ痕と思われる変色が認められる。東信ではごく稀に見られる小型甕である。



第22図　芝宮　ＳＢ89
出土土師器

その他、刳り鉋（くりがんな）と考えられる鉄製品が芝宮遺跡群の10世紀の住居跡（ＳＢ151）から出土している。長さは23.5cm・刃部の幅は1.3cmを測る。木製品の加工に使用されたと考えられるもので、完形での出土は古代ではほとんど類例が無いと思われる。



第23図　芝宮　ＳＢ151
出土鉄製品

6　郷土遺跡ほか（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19・整理作業）

担　当　者：桜井秀雄

昨年度は担当者が原村教育委員会へ派遣されていたため整理作業は１年間凍結していたが、再開した。そして今年度が整理作業の最終年度にあたった。本書には小諸市内に分布する、三子塚遺跡群・三田原遺跡群・岩下遺跡・石神遺跡群・郷土遺跡・東丸山遺跡・西丸山遺跡・深沢遺跡の８遺跡が収録される。時代的には縄文時代から古代まで様々な遺構・遺物が確認されているが、その中心は縄文時代であり、浅間山南麓にひろがる縄文遺跡群の報告書であるとも位置づけられよう。

ここでは郷土遺跡の今年度の整理作業について述べておきたい。今年度は遺物の実測・トレースと遺構トレースが作業の中心であった。とりわけ縄文土器は総計約300点以上を図化することができた。本遺跡は縄文時代中期中葉から後期初頭にかけての竪穴住居跡が100軒を超える大集落遺跡であるが、最も遺構数及び遺物量の多いのは中期後葉である。この時期の土器には加曽利Ｅ式・曽利式・唐草文系土器の３者が混在している。前半期にはなかでも唐草文系土器の出土が目立つ。当地の唐草文系土器には地域的特徴が顕著であり、「佐久系土器」と仮称されている。いまだ不明な点が多い「佐久系土器」であるが、本遺跡では相当量の出土がみられており、「佐久系土器」理解への良好な資料となるものと期待できる。

また、約20軒の竪穴住居跡と約70基の土坑、そして遺構外からは相当量の動物骨が出土していた。大半は縄文中期後葉に比定されるものと理解できるが、これらは㈱パリノ・サーヴェイ社に委託して金子浩昌氏の鑑定を受けていた。その結果の報告をこのたび受けた。それによると検出した動物遺体は鳥網ではキジ、哺乳網ではノウサギ・イノシシ、ニホンジカが認められている。そしてそのほとんどは強い被熱の痕跡が認められた焼骨で、保存は良好な部類にはいるという。種別ではイノシシが圧倒的に多く、反してシカは僅かな数にとどまっている。とりわけ1278号土坑からは大量なイノシシの焼骨が検出された。ここでは成獣３個体分の左右上顎骨と若獣の左右上顎骨１個体分、さらに幼獣の左右側頭骨が認められており、金子氏は頭骨が意図的に焼かれ、運ばれたものと想定している。本遺跡からは約1000基を数える土坑が検出されているが、動物焼骨を出土する土坑が果たしてどのような性格を有するものなのかなど、土坑の性格分類のうえでも極めて重要なキーポイントとなると考えている。また他遺跡においても戸倉町円光房遺跡、真田町四日市遺跡などでも同様な出土事例が認められており、地域的な特性であるのかどうかも興味のあるところである。

ところで、本遺跡からは早期末から前期初頭期の竪穴住居跡６軒、土坑４基も検出されているが、今年度はこれらの遺構に伴う土器及び遺構外出土の当該期土器の検討を行った。このうち遺構内出土の土器には、撚糸文を転がした上に沈線で縦・横・Ｘ状の文様が描かれる早期末の大畑Ｇ式に類似すると考えられる一群と、前期初頭の塚田式に類似する一群とが認められている。県内では類例の少ない資料であり、当該期土器研究において貴重な知見を提供できると思われる。

7　中原遺跡群・真行寺遺跡群ほか(上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書20・整理作業)

担　当　者：川崎　保

調査・整理：平成４年から７年度発掘調査、平成８年から10年度整理作業。

整理の成果：東部町の遺跡群は烏帽子岳西南麓に位置している。以下時代順に概述する。

縄文時代草創期・早期：草創期押圧縄文や早期初頭表裏撚糸文、撚糸文が森下遺跡、早期押型文が桜畑遺跡、中原遺跡群などで出土。中田遺跡の有舌尖頭器も草創期か。

縄文時代前期：真行寺遺跡群、山の越遺跡で前期初頭花積下層式および並行期の住居跡があり、複合扇状地上に集落が展開しはじめる。中葉には、真行寺遺跡群、桜畑遺跡、細田遺跡、中原遺跡群で各数軒ずつまとまる。中原遺跡群では住居跡群に伴う土坑群がある。土器は関山式および中越式が主体、細田遺跡では有尾式の住居跡も検出。神ノ木式は中原遺跡群で遺構外から少量出土。後葉は、真行寺遺跡群、山の越遺跡、森下遺跡、中原遺跡群で住居跡、土坑群がある。土坑群からは底部のみ欠損の略完形土器、管玉など出土土坑があり、墓壙か。

縄文時代中期：中期前葉は桜畑遺跡、山の越遺跡、中葉は細田遺跡、中原遺跡群、後葉は中原遺跡群でそれぞれ１～２軒ずつ検出されている。

縄文時代後期・晩期：中原遺跡群で後期初頭称名寺式の住居跡が１軒とそれに伴う土坑群、また後期前葉から中葉（堀之内１式から加曽利Ｂ１式）の土坑群や流路を検出。山の越遺跡では後期初頭の土坑群、釜村田遺跡では後期前葉（堀之内１式古相）の敷石住居跡も検出。晩期は森下遺跡で前葉から中葉の土器・土製品、有茎式石鏃が出土。中原遺跡群では土坑から有髯土偶や土器が出土。これらは弥生時代前期に並行する資料とすべきか。

弥生時代：前期の東海系条痕文土器の破片が中原遺跡群で出土。後期は中原遺跡群で住居跡１軒が検出。細田遺跡、森下遺跡で磨製石鏃が出土。

古墳時代：前期の住居跡が真行寺遺跡群、桜畑遺跡、細田遺跡、森下遺跡、山の越遺跡、中原遺跡群で数軒ずつ検出される。

古　　代：奈良時代末から平安時代初頭の住居跡が森下遺跡に、平安時代前期の９世紀代はほとんどの遺跡で住居跡がある。10世紀以降は減少するが、中田遺跡で当該期の住居跡群がある。

中　　世：真行寺遺跡群で区画溝、墓壙などの土坑群、竪穴建物跡、桜畑遺跡では竪穴建物跡、山の越遺跡では竪穴建物跡、墓壙などの土坑群がある。竪穴建物跡には柱穴、周溝、石組み、地床炉などの施設をもち、床面積も古代の竪穴住居跡に匹敵するものがある。これらは住居跡だろう。遺物は全体的に13～14世紀代は、貿易陶磁の龍泉窯系青磁碗が多い。国産陶器は古瀬戸卸皿、香炉、梅瓶、珠洲系須恵質擂鉢がある。「渡来銭」(宋銭)が多く出土。15～16世紀は古瀬戸天目茶碗といった国産陶器がほとんどで、貿易陶磁器は極めて少ないが、真行寺遺跡群で出土した明青花小皿は特筆される。土師器内耳鍋・皿、石臼、石鉢、台石、鉄斧、鋸、刀子などの生活用具も増加。ただし明銭は少ない。

近世以降：17世紀以降は遺物は寛永通宝、キセル、屋号の入った徳利、一輪指し、土瓶、火鉢など国産陶磁器が散見される。

8　大日ノ木遺跡ほか（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21・整理作業）

担　当　者：若林　卓

上田市内および坂城町内における、上信越自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成４年度～７年度にかけて、計13遺跡について実施した。

本格的な整理作業は平成７年度に開始し、土器の接合・復元、遺物の分類・実測、遺構図の修正・トレースといった作業を行ってきたが、平成９年度は担当者が外部派遣となったため一時中断した。再開した今年度は、報告書刊行に向けた原稿作成が作業の中心となった。

詳細は報告書に記載したが、以下、整理の結果明らかになった幾つかの点を記す。

上田市大日ノ木遺跡は、自然流路から出土した多量の縄文時代遺物と、古墳時代前期・古墳時代後期および奈良時代の集落が遺跡内容の主体である。特に、縄文時代早期末葉の絡条体圧痕文土器・絡条体条痕文土器と晩期後半氷Ｉ式土器、古墳時代前期前半の土器がまとまっており、上田小県地方における該期の編年・土器様相を考える上で重要な資料となるであろう。

上田市陣馬塚古墳は横穴式石室を有する後期の円墳である。破壊を前提とした調査とはいえ、当地方では基底面まで調査を行った例はあまりなく、古墳構造・築造工程に関する資料を提供した。遺物では、北関東に分布の中心をもつ須恵器補強帯大甕、橋本博文編年の２段階から３段階に位置付けられるＣ字状文銀象嵌鐔が注目される。

坂城町東平古墳群は３基から成る中期の古墳群である。方墳の２号墳・円墳の１号墳・円墳の砥沢古墳の順に築造され、一連の首長墓系列として把握することができよう。２号墳と１号墳は壷形埴輪・円筒埴輪をもつが、特に２号墳の資料がまとまっている。円筒埴輪は通常の規格から外れた個性的なものである。ただし、擬口縁凸帯を有するものを含んでおり、善光寺平南部との技法上の関係が考えられようか。２号墳の出土状況の分析からは、墳丘上に壷形埴輪と円筒埴輪を交互に立て並べた状態が推定できる。また、１号墳の主体部からは、実例としては珍しい連結櫛を含む多くの竪櫛が検出されている。

坂城町観音平経塚は中世の多字一石経経塚である。その直下に築かれた火葬墓と一体の構造をもち、墳墓に伴って経塚が造営された例のひとつといえる。蔵骨器に用いられる灰釉四耳壷は、古瀬戸前期様式成立以前のいわゆる古瀬戸草創期に位置付けられる資料である。経塚の背後には100基を越える五輪塔群が造立されており、また、経塚の上部に立てられた五輪塔もある。これらの五輪塔は、特に空輪の発達と風輪の退化という方向で形態の変化を追うことができる。当地方では、紀年銘をもつ五輪塔が少なく、型式変遷とその年代観についての理解は未だ大まかなものでしかないが、本遺跡の五輪塔はおよそ14世紀から15世紀の様相を示していると考えられ、この時期の五輪塔の型式変遷や地域色を考究する基礎資料となろう。

坂城町小山製鉄遺跡は10世紀前半頃の鍛冶集落で、屋外鍛冶炉（簡単な覆い屋？）等の鍛冶施設と、工人達の生活施設がセットで捉えられた。鍛冶関連遺物の分析から、本遺跡では精錬～鍛錬鍛冶工程が営まれ、その鉄素材として、別の製錬遺跡で生産された鉄塊系遺物が搬入された可能性のあることがわかってきた。

9　屋代遺跡群・更埴条里遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告24　整理作業）

担　当　者：寺内隆夫、鳥羽英継、平出潤一郎、水沢教子、宮島義和

両遺跡は長野盆地南部に位置し、調査区は千曲川右岸の旧河道、自然堤防上、後背湿地の全長約2.3kmにわたる。調査期間は平成３年から６年で、整理作業は平成７年から開始した。

すでに、『長野県屋代遺跡群出土木簡』『―弥生・古墳時代編―』の報告書が刊行されており、今年度末には『―古代１編―』が刊行される。ここでは、ようやく整理作業が本格化した『古代２、中・近世編』と『縄文編』の内、縄文中期後葉の成果について取り上げることとする。

『縄文編』刊行に向けての整理経過と中期後葉に関して新たに判明してきたこと

経過概略：『縄文編』刊行のための本格的な整理作業が始まったのは、平成９年度末である。継続して平成10年度は土器（テンバコ総数1450箱）の接合・復原・実測拓本・立面写真撮影と、石器（テンバコ総数1200箱）の一部選択、そして遺構図面修正を全て並行して行った。１年のみという基礎整理期間と報告書刊行年度に向けての引っ越し・作業員全交替が行われることが判明した時点で、グリッド出土土器の接合や遺構間接合、石器の接合等を断念した。

集落の集成：約50軒の竪穴住居跡は大まかに加曽利ＥⅡ新・加曽利ＥⅢ古・加曽利ＥⅢ新・加曽利ＥⅣ式並行段階（以下式並行を略す）の４段階の中で推移する。特に加曽利ＥⅢ古段階は体部に曲流する渦巻文を有する土器、加曽利ＥⅢ新～加曽利ＥⅣ段階は微隆起線文土器の多寡によりさらに細分される可能性が高い。前後の時期については、唐草文系Ⅱ段階の深鉢が集落南境の埋甕や住居跡の床下遺物として少数出土し、また称名寺式土器が集落西側の遺物包含層を中心に散発的に出土しているにすぎない。住居跡群は全体としては南群と北群の双環状構成をとるが、時期毎に分けると３～10ｍ程度の間隔をもって数件が散在する。

特に住居形態が変革を迎えるのは加曽利ＥⅢ古段階のうち新しいと推測される時期である。集落の中央に位置する焼失住居（ＳＢ5345）は、主柱穴を結んだ線より南外側の位置に縦３つの埋甕が並ぶが、壁材の形態からその延長上の南側が張り出すホームベース形を呈する。また、同様に南側に入れ子の埋甕と部分敷石を有するＳＢ5346は埋甕の延長線上南側に小張り出し部と入口ピットを有する。また、ＳＢ5351は柄にあたる施設こそないが、柄鏡形敷石住居であるＳＢ5325で見られるような２段の掘り込みを有する。ともに入口が南側を向き柄部に複数の埋甕を持つ加曽利ＥⅢ新段階の柄鏡形住居跡と共通点が多い。これらは本遺跡における定型的な柄鏡形敷石住居成立に向けての変容過程を示すものと考えられる。更にこれら住居跡に共通する埋甕はいずれも大木系土器のみであることから、最近信濃川上流域で発見され始めている大木８ｂ～９式段階の柄鏡形住居との関係を模索する必要性が生じている。

土器破棄の様相：出土土器のうち通時的に変遷の追えるものは、主体を占める加曽利Ｅ系、大木系、圧痕隆帯文土器の他に、「渦巻多連タイプ」が在地タイプとして認定できる。これらの加曽利ＥⅢ段階における廃棄状況を見ると、住居跡毎に各系統の土器の顕著な偏りが確認される。また炉の火床の上に割られた状態の土器が文様部分を下にして敷き詰められている例が５例確認されたがその主体は圧痕隆帯文土器である。一方本遺跡は把手を有する土器が多く、その形

態も「双翼状」から「嘴状」へと段階的に変化する。これらの把手部分や加曽利E式の波状口縁頂部は故意に打ち欠かれて出土しているものが多い。把手2つが欠損している以外完形の土器の把手の一つが、40m離れた住居跡の埋土から発見された例も見られる。このように土器群は系統やタイプによってその使われ方、捨てられ方にまで違いが反映されていることがある。将来的に模索すべき課題であろう。

一方掘立柱建物や屋外火床に廃棄・遺棄された一括土器の中には被熱の著しいものが多い。土器の中には芯までぼろぼろになり、含有鉱物が変質しているものまである。通常の使用後にかなり高温の熱を受けたものと考えられ、単なる廃棄の枠を越えた問題を提起している。

異系統土器・漆付着土器ほか：異系統土器としては北陸地方に分布する串田新式がI式、II式ともに認められた。肉眼観察では胎土も在地のものとは異なる。一方これが加曽利E系と折衷した器形・文様構成を有し、肉眼的に在地の胎土で作られている土器も出土している。

漆付着土器に関しては、中期前葉・後葉ともに漆パレットが確認され、現在も抽出が続いている。漆工芸技術がかなり確立されたものであることから、中期前葉段階以降の技術の継承が推測され注目される。また、千曲川流域での生業の解明を目的として行ってきた住居跡埋土や埋設土器内土壌の水洗選別では、魚の椎骨・貝類などが検出され、同定結果が期待される。

石器石材：住居跡出土の剥片石器は、石鏃・スクレーパーなどの石材はチャートが黒曜石を凌駕し、打製石斧などでは粘板岩が剥片・製品ともに主体を成す。剥片の中にはガラス質安山岩製のものも発見され、少量の佐久系土器に代表される佐久方面との交流の問題とも関連し重要である。今後は住居跡毎の礫石器をも含めた組成差の検討が課題となろう。

終わりに　以上、中期後葉で気づいた点を羅列してみたが、実際のところ1年間の整理では後・晩期面を含む遺跡全体の把握もまだできていない。これらの課題を検証するための遺物操作期間はもはや残されていないが、せめて報告書の編集作業の中で再考していかれたらと思う。

第24図　屋代遺跡群⑤b区　縄文中期後葉　集落

10　松原遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書５・６　整理作業）

担　当　者：上田典男　青木一男　市川桂子　贄田　明　町田勝則　西嶋洋子

１．経過

本遺跡は、長野市松代町東寺尾に所在する縄文時代から中世及び近世に至るまでの複合遺跡で、平成元年度から同３年度に発掘調査が実施された。整理作業は、翌平成４年度から基礎整理が、平成６年度から一部時代別の担当者を置き本格的な整理作業が開始され、現在に至っている。この間、平成９年度に縄文時代に関わる報告書が刊行されている。

２．本年度の整理作業

①上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書５

弥生時代の調査結果及び松原遺跡総論について報告する本書は、発掘調査データーが膨大なため、８分冊に分けて刊行することとなっている。分冊内容は以下の通りである。

第１分冊：調査概要・弥生時代中期遺構本文　　第５分冊：弥生時代中期石器・その他
第２分冊：弥生時代中期遺構図版　　第６分冊：弥生時代後期・古墳時代前期
第３分冊：弥生時代中期土器本文　　第７分冊：弥生時代考察・検索
第４分冊：弥生時代中期土器図版　　第８分冊：松原遺跡総論・科学分析

本年度は、土器及び遺構の図版・写真図版の作成、石器の分類・集計・写真撮影を主に実施し、第２・４・６分冊の３冊を刊行した。次年度、残る５冊を刊行し、同報告書の刊行業務を終了する。

②上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書６

本書は、後期古墳及び古代・中世の調査結果を中心とした報告書で、次年度刊行が予定されている。本年度の整理作業は、遺物に関しては、住居址出土の土器を初めとして、各種の遺物実測・分類・計測・図版作成・写真撮影等を中心に、遺構に関しては、時期判別・分類・属性分析・図版作成等を主に実施した。いずれも多岐にわたるため、作図や分類・計測方法、あるいは視点などとそれぞれに専門性が要求されることは言うまでもないが、各方面からの協力を得て、破綻することなく着実に進めている。

３．中間報告

ここでは、「上信越道６」に関わる整理作業を通して得られた所見を記す。当該期には、遺跡範囲全面にわたって遺構・遺物が分布し、トンネル坑口部にあたる山麓斜面部には後期古墳群・中世墳墓群が、平坦部には古代集落を中心とした遺構群が分布する。これら三者がそのまま本書の三本柱となるが、それぞれが第一級の資料と言える。

①後期古墳群

調査区内では３基の古墳が検出されたが、中世墳墓群の分布域と重複しているため遺存状況が悪く、２基については古墳の構造を示す構築物のみの検出となった。遺存状況の比較的良好

な１号墳についても、石室内に中世墳墓が構築されており、中世墳墓構築時にすでに古墳の体を成していなかったことが予想される。このことは逆に、後世の盗掘などの標的から免れる結果をもたらしたと言えよう。１号墳からは、実に多彩かつ豊富な副葬品が出土しており、北信地域の後期古墳を代表する遺物群として評価されよう。また、１・３号墳は、床下に配水施設を伴うという構造的特質を持つなど、構造面からいっても注目すべき古墳群である。なお、１号墳石室では、遺存状況が極めて悪いものの、頭骨が７体分検出されており、副葬品の出土状況からも追葬が実施されていたことが明らかとなっている。

②古代集落

竪穴住居址がおよそ400軒検出されているが、住居址配置などには規格性が乏しく、また、掘立柱建物址の検出数も極端に少ないという状況である。ただし、海老錠の一部(鍵)・サイコロ（鹿角製）など、地方官衙遺跡等で出土することの多い遺物や、磬（仏具）の鋳型・杏葉轡などの所謂珍品も出土していることから、単に住居址数が多いだけの集落とは言い切れない部分がある。また、住居址等から出土した土器類も豊富で、長野盆地の古代土器編年を構築する上で重要な資料となり得る。特に、煮炊形態については、段階を追ってその変遷が把握できそうである。その他、鉄鏃・刀子・紡錘車などの鉄製品、砥石・石帯などの石製品、円筒形土製品・土錘などの土製品、占骨を含めた骨角牙製品、曲げ物・人形などの木製品、鍛冶関係資料、文字関係資料と数量・内容とも充実した遺物が出土している。加えて、昆虫・植物遺存体・人骨・獣骨などの自然遺物の他、調査区北東端部に流れる河川址からは梁と想定される杭列と木組が検出されており、さしづめカタログの様相を呈している。事実記載に主眼を置いた報告書編集方針の所以である。なお、杏葉轡については、類例も少ないため、当センター刊行の『紀要』７に資料紹介しているので参照されたい。

③中世墳墓群

本遺跡では中世に属する墓址として、山麓斜面部に展開する墳墓群と平坦部に分布する墓址が存在する。両者が、同一時期の所産かどうかは、時期を特定できる情報が少ないため明らかにし得ない。斜面部に展開する墳墓群は火葬墓と火葬施設で構成されており、多数の五輪塔を伴っている(ただし、五輪塔は原位置を保つものはほとんど無い)。これらの火葬墓は、斜面掘削→平坦部（テラス）作出という作業を経た後に形成されている。また、火葬墓の形状及び状況から、遺体を火葬に付した後、火葬骨を拾骨し有機質の容器に納め、作出されたテラスに埋納していたことが理解される。火葬骨は平面形が10cm前後の円形もしくは方形に充満した形で検出されており、曲げ物または木製の箱が蔵骨器として用いられていたことが推測される。こうした斜面部に展開する墳墓群は、中世の集団墓として把握され、長野盆地南部では稀有な事例として注目されよう。

以上のように、松原遺跡は、「上信越道６」に拘らずどの時代を切っても重要な資料群が揃っている。それぞれの報告書刊行を重大な責務と捉えると同時に、刊行後に展開するであろう活発な論議を期待するものである。

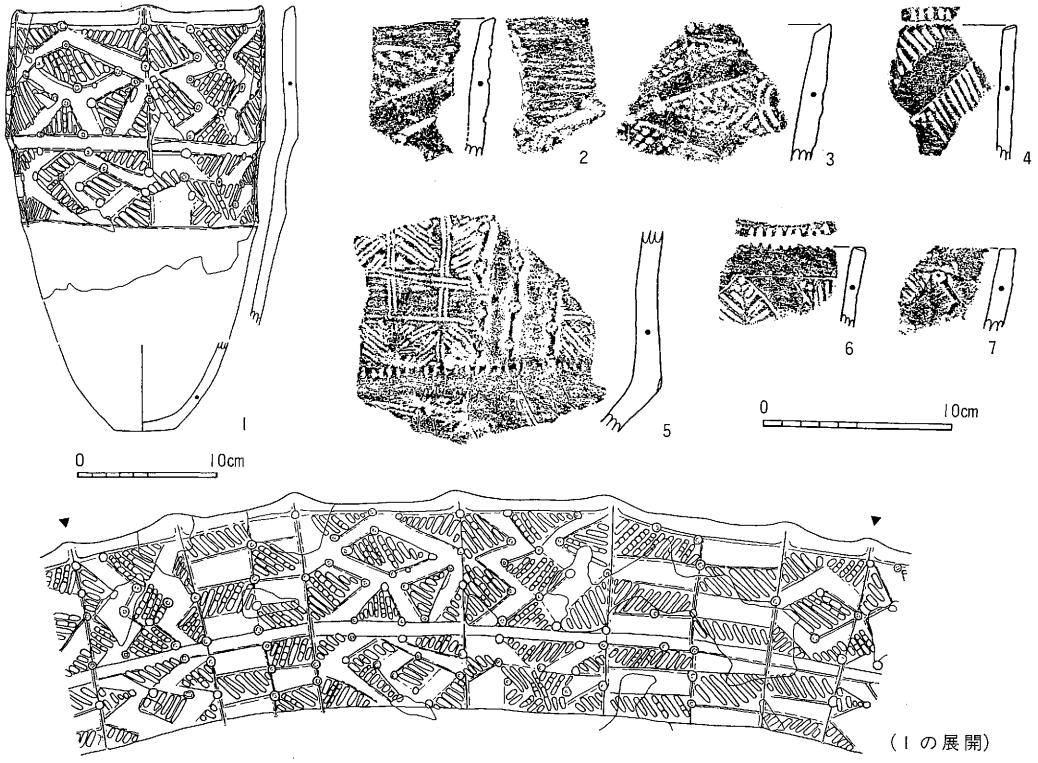
11　村東山手遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書８・整理作業）

担　当　者：鶴田典昭

経過と本年度の作業　平成９年度より整理作業を続けており、本年度はトレース・図版作成、原稿執筆を行ない、平成11年３月に報告書を刊行する予定である。

中間報告　本遺跡は縄文後期堀之内式土器の時期を中心とした集落跡であることには変わりないが、整理作業で発掘時の認識（埋文センター年報６・７）とは異なった新たな所見が明らかとなってきた。①縄文時代早期後半の鵜ガ島台式土器の良好な資料が抽出されたこと、②縄文時代前期初頭から前期中葉関山式並行の土器が比較的多く出土しており、新潟地方の土器が少数見られること、③縄文後期堀之内２式土器と新潟地方の南三十稲場式土器が同じ土坑から出土していること、④弥生時代後期に調査区周辺の谷間が墓域であった可能性があり、東海系・北陸系の土器が数点出土していること、⑤奈良時代の墳墓と考えられていたＳＭ04が古墳の石室を再利用したもので、その古墳に埴輪が伴った可能性があること、などである。

今回は、上記①の鵜ガ島台式土器を紹介する。県内で鵜ガ島台式土器の良好な資料は少なく、器形復元される資料は管見にふれる限り、御代田町塚田遺跡Ｄ17号土坑出土の例と本遺跡ＳＫ20（第25図１）の例のみである。遺構外でも同型式の土器片が出土しており、合わせて提示した。詳細は報告書を参照していただきたい。



第25図　村東山手遺跡出土の鵜ガ島台式土器

12　小滝・北之脇・前山田遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書９・整理作業）

担　当　者：市川隆之

小滝・北之脇・前山田遺跡は長野市内の千曲川右岸に所在し、上信越自動車道建設に伴って平成元年～４年度にかけて発掘調査された。いずれも中世を中心とする小規模遺跡であることからまとめて報告することになり、平成９年度から２年計画で整理作業に着手した。本年度は整理の最終年度にあたり、木製品や石製品の実測作業、および遺構の整理と遺構・遺物実測図のトレース、製版、原稿執筆、遺物や調査記録類の収納を行った。遺跡の概要については前年度の年報にも報告しているが、ここでは新たに判明してきたことを紹介しておく。

３遺跡はいずれも山城のある尾根山麓の緩斜面に立地し、16世紀前後の時期に居住域として利用される類似点が認められている。しかし、子細にみると各遺跡の存続時間や遺跡の構造は若干異なる様相も看取された。そこで、各遺跡の共通点・相違点、遺跡の変遷を明らかにする目的をもって整理を進め、遺跡変遷として以下のような様相が想定された。

まず、小滝遺跡であるが、13～14世紀前後に単発的な利用があるものの、15世紀後半前後から再び利用されるようになり、そのまま16世紀へ連続するようである。そして、一部は17世紀前半ごろまで居住地として利用され、最後に耕作地へ転用されてしまうようだ。このなかでＣ区とした山手から少し離れた微高地では16世紀頃に前代の土地利用をそのまま取り込みながら区画が再編され、類似した規模の屋敷地区画が広域的に出現するようである。また、一方でＡ区とした山際の緩斜面部分では、17世紀初頭？に石垣を伴う整地を行って、大規模な屋敷地の造成を行っていることも知られた。このＡ区の屋敷地はＣ区屋敷地より若干後続し、規模も大きく、整地を伴う石垣や石列・礎石建物跡が構築されている特長に加え、内部は機能の異なる空間から構成される可能性が想定された。なお、Ｃ区で散在的に埋葬施設が検出されているが、時期の詳細は不明ながら土葬墓の大部分が子供を埋葬したものであること、上面に集石を伴う火葬施設が存在することが知られた。

次に北之脇遺跡であるが、この遺跡は16世紀代の特定時期のみに居住が認められ、それ以前・以後ともに継続しない。遺構配置は極めて計画的と感じられ、中央に遺跡内を縦断する帯状集石遺構（道跡？）を挟んで幅25―26ｍ単位に区切られた屋敷地が並列していた可能性が想定できた。ここでは掘立柱建物跡が全部で13棟認定されたが、いずれも規模や構造が類似するもので、同等階層の居住者から構成されると推測できる。なお、このなかの１棟より鍛冶炉が検出され、鍛冶を行う者が含まれていた可能性も知られた。

最後に前山田遺跡であるが、この遺跡では13～15世紀まで僅かながら利用が認められ、15世紀末前後から本格的な利用が開始されるようである。遺跡本来の地形は山際の狭い崖錐地形であったようだが、本格的な利用にあたって広いテラス部を造成する整地が行われている。ただし、小滝遺跡のような石垣遺構は伴っていない。これ以後は近代に至るまで居住地・寺として利用されているが、17世紀頃と近世末期から近代にかけて再編成が加えられた可能性も想定された。この前山田遺跡には江戸時代から現代まで観音寺と呼ばれる寺が所在していたことが知

られるが、その創建年代は伝承では戦国時代頃ともいわれ、17世紀に一旦自然災害で倒壊したものを須坂藩が再建したという。調査では自然災害による倒壊や須坂藩による再建は跡付けできなかったが、遺跡の出現が15世紀末にさかのぼる可能性があること、17世紀に再編成されていることは推測された。遺跡の性格は当初より寺であったかは不明であるが、近在の遺跡のなかでは比較的多くの青磁・大窯製品・唐津・越中瀬戸が得られ、他には僅かながら初期伊万里製品もみられる。このことから極めて特殊な遺跡ではあったようだ。また、他には象眼を施した小刀や鎧小札、ルツボや炉壁、鉄素材とも考えられる板状鉄塊などの手工業製品、近世の所産ではあるが石臼未製品が出土して注目される。

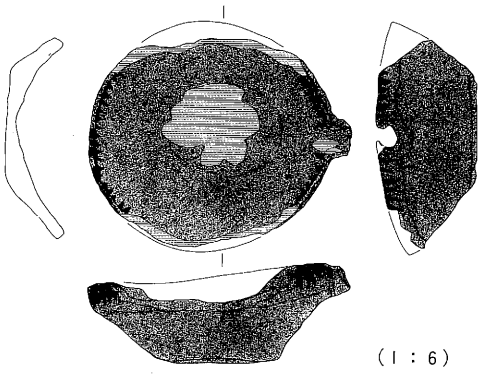
以上のように小滝・北之脇・前山田遺跡は出現・存続時期にずれがあるもの、戦国時代に重複して存在したとみられ、なかでも小滝・北之脇遺跡では16世紀頃に広域的な屋敷地区画がつくられたようだ。また、掘立柱建物跡には庇状柱列を付設する形態が共通して認められたが、類例は17世紀の遺跡にあり、近世民家へ連続する建物形態とみられる。

このように３遺跡の規模は小さいが、当地域の中世から近世の様相を知る上で興味深い資料になろう。特に戦国時代前後に居住地として利用されることは共通した背景によるものと思われ、時期的にも中世と近世の狭間にあたることから集落の変化を考える上で注目されよう。詳しくは報告書を参照されたい。

13　春山Ｂ遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書11・整理作業）

担　当　者：臼居直之

長野市若穂綿内に所在する弥生時代中・後期を主体とする集落遺跡で、調査は平成２年度と４年度の２か年実施した。竪穴住居や井戸内からは大半が弥生後期に属する木製品約80点が出土したが、特異な製品が含まれている。ＳＢ30号住居出土の片口鉢（第26図）は、赤漆を地に塗り込め、口縁端部に黒漆で鋸歯文様を廻らせる刳物で、逸品である。従来、赤漆・黒漆を使用する製品ついては、その有無・所有関係等に特殊な意義が考えらてきた。この製品は形状・文様とも土器に通じ、漆製品の意味を考えるに重要な資料となろう。ＳＫ43の井戸枠に転用された丸木舟は、約２年の保存処理と１年にわたる修復が完了し、完全に復元された。弥生時代の丸木舟の出土例としては現在のところ東限で、原形復元された数少ない例として、注目されるだろう。本報告書は来年度刊行予定である。



第26図　ＳＢ30号住居出土木製片口鉢（１：６）

14　川田条里遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10・整理作業）

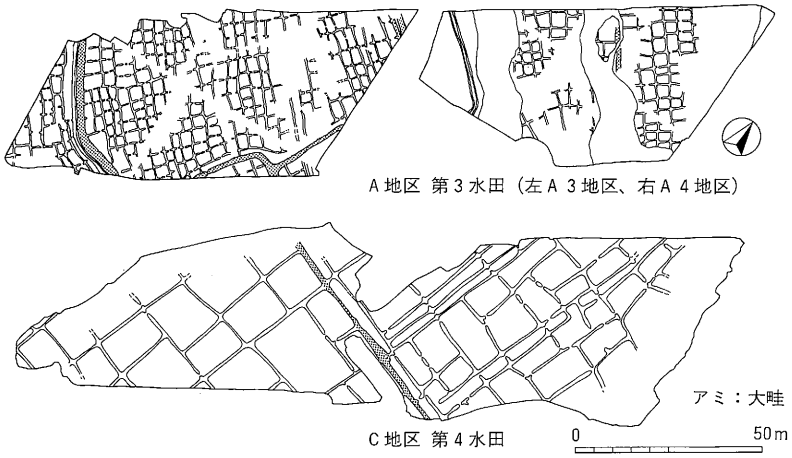
担　当　者：鶴田典昭、伊藤友久、河西克造

１．経過と本年度の整理作業：川田条里遺跡は長野市東部若穂川田地籍に所在する。千曲川右岸の後背湿地に立地する水田遺跡である。発掘調査は平成元～２年度に実施され、弥生時代中期から江戸時代までの水田跡が重層的に検出された。整理作業は平成３年度から木製品の記録および保存処理が行われた。一時中断の後、昨年度から土器と未処理の木製品の実測、本年度に土器・木製品の実測・トレースと、遺構図・水田全体図を作成した。

２．中間報告：本年度、遺構に関係した整理作業では、①調査面と土層との対比、②遺構と出土木製品・土器との関連性、③水田の時期、について検討を行った。

ここでは大室古墳群18号墳が立地する尾根から保科川までを範囲としたＡ・Ｂ・Ｃ地区の遺構検討で明かになったことを記す。検出水田跡については、各調査面ごとに水田面、被覆層、大畦内出土土器を観察して埋没時期を把握した。その結果、赤野田川付近（Ａ地区）と菅平線付近（Ｂ地区）の最下層の水田が弥生時代中期に営まれていたことが確認された。県内で弥生中期の水田が確認されていないため、重要な資料となろう。水田区画の点では、水路を伴う大畦で大区画が形成され、内部に極小区画水田が展開する様相が古墳時代中期に出現していた。さらに奈良・平安時代に埋没した水田には、条里型を示すもの（Ｃ地区第４水田）と小区画が残る古墳時代的様相のもの（Ａ地区第３水田）が認められた。出土土器から前者が奈良時代、後者が古墳時代中期に構築されている。埋没直前に両者が並存していたか、または時期差が存在するかは条里型地割の出現時期と条里施工方法の問題に深く関係する。今後の土器の検討で明かにして行きたい。なお、本遺跡で広範囲にわたる正方位の条里型地割が展開したのは、９世紀初頭以降であることが確認された。

本遺跡では、大畦の芯材として高床式建物の開口部に納まる楣材と蹴放材などの建築部材が転用されている。出土土器との検討で古墳時代前期頃に転用されている傾向が認められた。



第27図　川田条里遺跡Ａ・Ｃ地区の水田跡

15　榎田遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12・整理作業）

担　当　者：広田和穂　町田勝則　山崎まゆみ

経過：榎田遺跡は、長野市若穂綿内に所在し、千曲川右岸にある旧河道の中州状微高地と後背湿地に立地する。発掘調査は平成元～４年度に行われ、調査面積は約44470m²に及ぶ。発見された住居址は約1000軒に及び、弥生時代中期～平安時代・中世までの間に断続的に集落が営まれたことが判明した。この中には、弥生時代中期の太型蛤刃石斧の製作関連址や、古墳時代中期の木製品や土器を大量に出土した沼址（ＳＧ３）など、特筆すべき遺構も存在する。整理作業は平成５年度と７～10年度の５年間行われた。

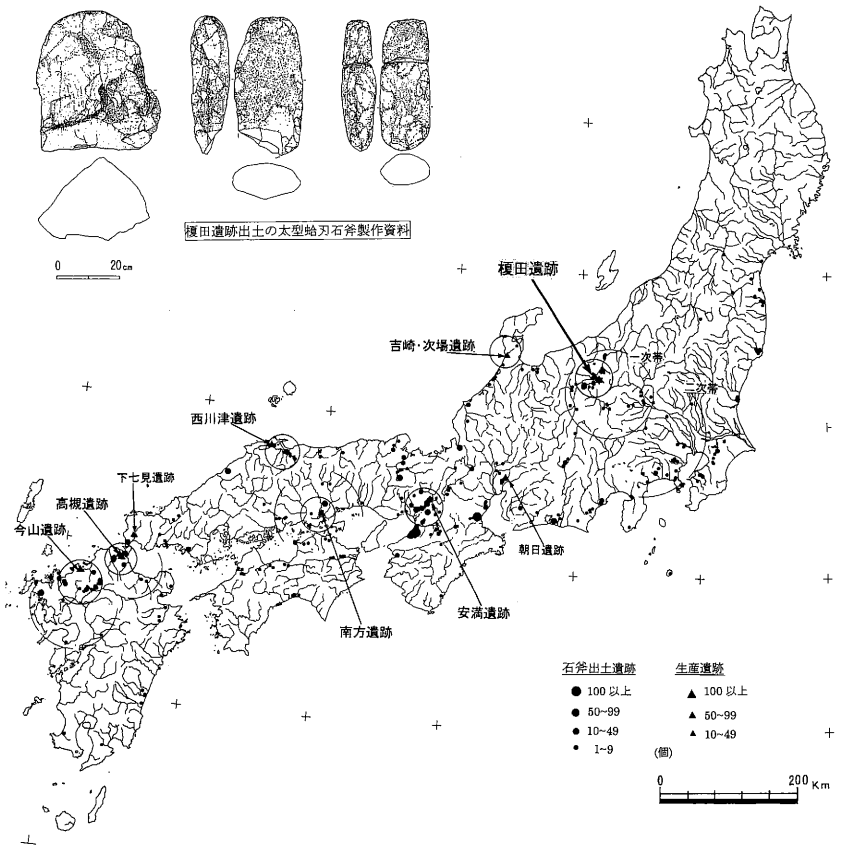
本年度の作業：整理作業の最終年度であり、図版類の作成と原稿執筆を主として、遺物・図版類の整理を行い、平成11年３月に報告書を刊行した。

終了報告：本遺跡の成果については本報告を参照されたい。ここでは、報告文中で検討の及ばなかった磨製石斧製作に関する『生産と流通』の問題について、若干のまとめをしておきたい。本遺跡は弥生時代中期後半（近畿編年Ⅳ様式期相当）に属し、太型蛤刃石斧を中心とした製作痕跡を集落内に留めている。製作の特徴は、①石材が（変質）玄武岩・（変）輝緑岩に限定され、②大規模な石材産出地が遺跡の背後に存在する、③原石（母岩）から敲打段階までの製作資料が中心であり、研磨段階及び製品の出土が見られないことなどである。

このような特徴を持つ太型蛤刃石斧の製作は、これまで唯一、福岡県今山遺跡の製作資料に対して認めることができ、それが弥生文化研究の中で、特定器種を介しての『生産と流通』を語るに相応しい題材として取り上げられきたことは周知のとおりである。この場合の『生産』が、単に石を打ち割っての製作行為一般を指すものでないことは言うまでもない。何故ならばこの例に見られるような、特定の原産地を持つ石材を限定し、洗練された製作方法で規格化された製品を量産する、そして何よりも特徴を同じくする製品が広範に流布していることこそ、「製作および流通」を想定するに必要な条件と考えられるからである。中部・関東地域の太型蛤刃石斧は、習慣的に「閃緑岩」と呼称された特定石材を用い、殆ど例外なく製作痕跡を留めず、ほぼ同一形態の製品のみが組成すると言う特徴を持つ。それらの石材が、今回の調査で判明した変質玄武岩及び変輝緑岩と岩石学的に密接不離なものであることは、分析の結果明らかとなった（報告文第Ⅶ章第３節）。また石斧の形態的類似性に於いても、輪郭線投影による一致から、同じ規範形を反映した可能性を示唆することができた。もちろん当該地域に、「閃緑岩」製以外の太型蛤刃石斧が存在し、かつ製作痕跡が認められることは、発掘遺跡の石材別円グラフによっても明らかであるが、それが特定器種の量産としての『生産』を意味するものでないことは自明である。つまり、現状の認識に於いては、『緑色岩類』と称すべき石材に特定し、太型蛤刃石斧の集中的な製作及び規格品の量産を行なったと考えられる遺跡は、当該地域にあっては長野市榎田遺跡に限られるのである。結論を急ぐつもりはないが、そこに特定器種に限定した「製作そして流通」を予想したい。

ここで重要なのは、榎田遺跡で製作された蛤刃石斧が、いずれも敲打段階までで、研磨段階

の資料を欠如することにある。研磨段階が欠落する点は、まさに今山遺跡と同質であり、やはり敲打段階での搬出を考えるべきである。研磨作業の有無は、敲打から研磨に至る未完成品の存在により、あるいは石斧研磨用砥石の存在によって推定が可能となるが、既出資料にそれを求めれば、該当遺跡は極く少数である。敲打段階での搬出を仮定すると、搬出された石斧が搬入した集落で研磨され、そこで使用される（搬入集落＝使用集落）場合と、搬入した集落で研磨された後、再び別の集落へ搬出される（搬入集落≠使用集落）場合の２つのケースが想定できる。現時点では榎田遺跡を取り巻く千曲川流域の遺跡群で、長野市中俣遺跡などが前者に、長野市松原遺跡が後者に該当すると考えられる。中部・関東地域に存在する多くの遺跡では、製品としての存在のみが濃厚で、そこに中俣のようなケースを予想できない。松原を中心とした善光寺平南部、あるいは千曲川流域に在る栗林式の遺跡群を通して、太型蛤刃石斧製品を搬入していた可能性が高いと考えられる。これを「流通」の概念で取り纏めれば、それを目的とした量産品としては量的に貧弱であり、そこに経済的・商業的な効果はあまり見込めそうもない。榎田遺跡が『原産地直下型』の集落遺跡であって、今山のような原産地直上の生産遺跡ではない点を評価すれば、ここ中部地域に展開した太型蛤刃石斧の『生産と流通』の機構が、今山遺跡に見られる生産・流通段階以前の様相を示すものと見ることができるのかも知れない。



第28図　太型蛤刃石斧の分布と生産遺跡（弥生Ⅰ期～Ⅳ期）

16　日向林Ｂ遺跡・貫ノ木遺跡ほか
（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15・16　整理作業）

担　当　者：大竹憲昭　谷　和隆　中島英子

１．経過と本年度の作業　上信越自動車道は上水内郡信濃町野尻湖の南西部の丘陵地帯を通過した。用地内に11ヶ所の周知の遺跡があり、平成５年度から平成７年度まで、３年間の発掘調査がおこなわれ、旧石器時代の資料を中心に多数の遺構・遺物が検出された。平成８年度より報告書刊行に向けた通年の整理作業体制にはいった。

資料総数は膨大で、遺跡の位置と規模・時代を考慮して、報告書は以下の４分冊にして刊行する計画に沿って、本年度も整理作業を進めた。

第１分冊（旧石器時代編Ⅰ）七ツ栗遺跡・日向林Ｂ遺跡・大平Ｂ遺跡

第２分冊（旧石器時代編Ⅱ）裏の山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡

第３分冊（旧石器時代編Ⅲ）貫ノ木遺跡・西岡Ａ遺跡

第４分冊（縄文時代以降編）星光山荘Ｂ遺跡・貫ノ木遺跡・東裏遺跡・日向林Ｂ遺跡他

２．中間報告　旧石器時代については、各遺跡とも特徴を異にする石器群が複数認められることが明らかになってきた。石器群の差は、時期差であったり、遺跡の性格差、遺跡を形成した集団差などが考えられ、現在、石器群の内容の詳細な検討や石器群相互の比較をおこなっている。以下、整理作業により本年度までに判明したことの一部を報告する。

七ツ栗遺跡：下層に小形二側縁加工のナイフ形石器・掻器を特徴とする石器群、上層に杉久保型ナイフ形石器を伴う石器群がある。

日向林Ｂ遺跡：後期旧石器時代初頭の環状ブロック群は、斧形石器60本や台形様石器を多数出土した。第29図に環状ブロック群の主要な石材である黒曜石と玉髄の平面分布と接合線を示した。環状ブロック群の周辺部に位置するブロック群に石材の偏在性が認められる。接合線からこれらのブロック群がほぼ同時期に残されたこともわかる。また、上層にはナイフ形石器・掻器・石刃を特徴とする石器群がある。

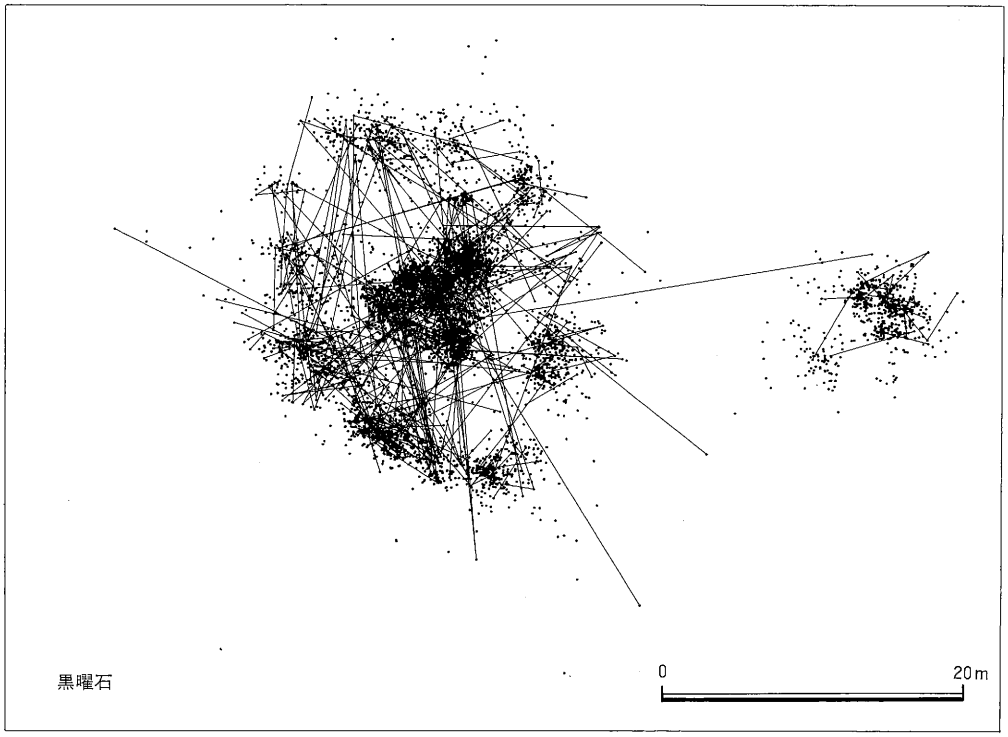
大平Ｂ遺跡：小形二側縁加工のナイフ形石器と円形掻器を特徴とする石器群と、神子柴型石斧を伴う石器群の２つが認められる。

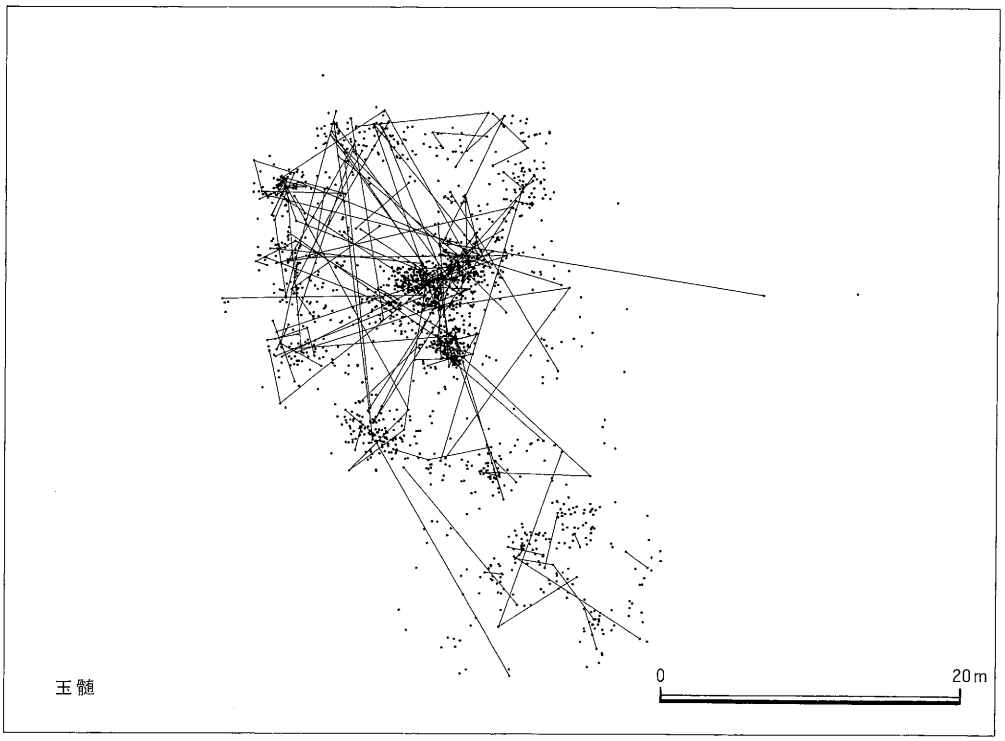
裏の山遺跡：遺跡の主体は大小の二側縁加工ナイフ形石器・掻器の石器群であるが、斧形石器・台形様石器をもつ石器群や槍先形尖頭器石器群、細石器石器群などもある。

東裏遺跡：遺跡は尾根上と低地部に分かれるが、両者ともに斧形石器を伴う石器群、多様な形態をもつナイフ形石器を伴う石器群により形成されている。

貫ノ木遺跡：後期旧石器時代全般にわたって形成された拠点的な遺跡で、他の遺跡にみられた石器群がすべてあるといっても過言でないほどである。調査時ははっきりしなかったが、黒曜石を主体とした環状ブロック群も存在することが判明した。

西岡Ａ遺跡：Ⅲ層～Ｖａ層の間に彫器・石刃を特徴とする石器群、横長剥片をもちいたナイフ形石器(国府系石器群)、黒曜石製の小形半両面調整尖頭器・円形掻器を特徴とする石器群など多様である。





第29図　信濃町日向林Ｂ遺跡黒曜石（上）および玉髄（下）の平面分布と接合状況

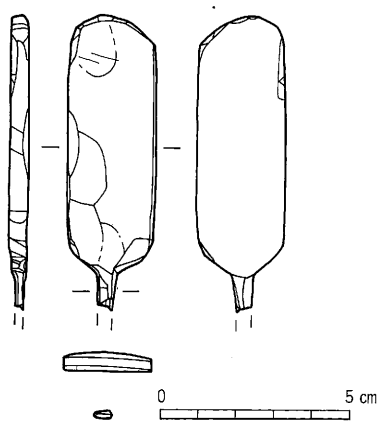
17　屋代遺跡群国道403号（土口）バイパス地点　（整理作業）

担　当　者：西　香子

本遺跡は、千曲川右岸の自然堤防上に立地し、平成９年度に発掘調査を実施した。今年度は報告書刊行向けての整理作業を行った。上半期は土器・石器など遺物の拓本や実測、検出遺構の図面整理を中心とした作業にあたり、下半期は図面トレース、図版・写真図版のレイアウトや原稿執筆といった作業を進めてきた。報告書は平成11年度刊行予定である。

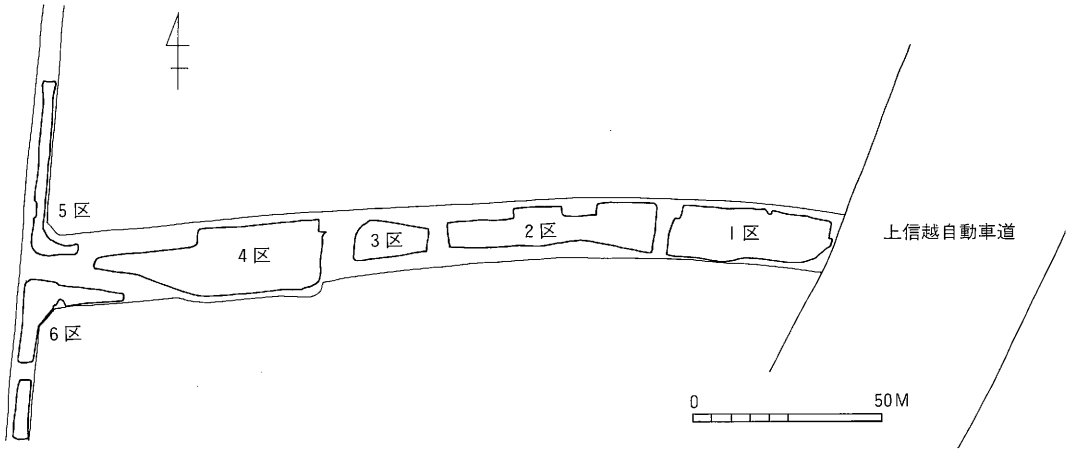
本遺跡では縄文時代後期、弥生中期、古墳時代中期･後期、奈良時代、平安時代、および中世の遺構が検出されている。遺物の整理が進んで、遺構の細かい時期も明らかになり、古墳時代から古代・中世にかけての土地利用の変遷がわかってきた。

上信越自動車道調査地点から広がる古墳時代中期～後期の集落は、その西端の境界が２区東端で確認できた。７世紀後半～９世紀中頃は集落がさらに西に広がり、時期によって疎密の差はあるが、ほぼ調査区域全体に集落が広がる。そして９世紀末の大洪水までにはそれらの住居は全て廃棄されてしまい、３区より西側で一部に畑跡が検出される他は遺構がほとんどなく、集落の中心は他の地域へ移動してしまう。そしてしばらくの断絶のあと、４区から５区に中世の館を囲む幅約９ｍの堀が形成される。



第30図　題箋軸状木製品

古代から中世にかけての井戸跡より、多くの石器や石製品・墨書土器・木製品などが出土している。中でも注目されるのは平安時代の井戸跡から出土している題箋軸状木製品である。他の出土例にくらべると軸部の幅がやや細く、墨書が認められないことから題箋軸とは断定できないが、出土例のほとんどは官衙関連遺跡からであり、時期的に多少のずれがあるとはいえ、古代の木簡が大量に出土した屋代遺跡群（上信越自動車道地点）のすぐ隣である本遺跡からの出土はたいへん興味深い。



第31図　屋代遺跡群国道403号（土口）バイパス地点調査範囲（１：2,000）

II　普及・公開活動の概要

1．現地説明会

平成10年10月10日（土）に大町市山の神遺跡、11月28日（土）に茅野市聖石遺跡でそれぞれ現地説明会を実施した。山の神遺跡では、縄文早期押型文期の遺構や出土遺物が公開され、約240人の見学者が訪れた。

また、聖石遺跡で公開されたのは縄文中期後半期の集落跡及び出土遺物で見学者は210人であった。

第32図　山の神遺跡現地説明会

2．企画展

平成11年1月23日(土)～2月13日(土)の期間、長野県県民文化会館展示室において、長野県埋蔵文化財センター速報展「発掘された大昔のくらし」を開催した。当センターが発掘調査を行った遺跡の中から、長野市内及び周辺地域で調査報告書が未刊行の遺跡を中心にパネルで紹介し、長野市春山B遺跡のコーナーでは、井戸枠に転用された弥生後期に所属する木製舟の復元が終了したため、併せて公開した。また、今年度調査の山の神遺跡・聖石遺跡からは、パネルと出土遺物の一部を展示した。その内容は、以下のとおりである。

野尻湖遺跡群（信濃町）：局部磨製石斧（パネル展示）、3万年前の暮らし（模型展示）
松原遺跡（長野市）：弥生中期の環濠集落・人面土器（パネル展示）
篠ノ井遺跡群（長野市）：弥生後期の円形周溝墓（パネル展示）
　　箱清水式土器（パネル、実物展示）
榎田遺跡（長野市）：弥生中期の布・石斧製作関連資料、5世紀代の木製馬具(パネル展示)
川田条里遺跡（長野市）：古墳時代の水田跡・木製品（パネル展示）、足跡（石膏型）等
屋代遺跡（更埴市）：縄文中期後半の埋甕、古代の木簡等（パネル展示）
観音平経塚（坂城町）：中世の五輪塔群等（パネル展示）
郷土遺跡（小諸市）：縄文中期後半の集落全景等（パネル展示）
春山B遺跡（長野市）：弥生後期の木製舟（実物展示）
山の神遺跡（大町市）：集石遺構（パネル展示）、押型文土器・トロトロ石器等（実物展示）
聖石遺跡（茅野市）：竪穴住居跡・翡翠製垂飾（パネル展示）
　　縄文中期後半の土器・黒曜石・石鏃・石棒等（実物展示）

企画展・速報展は、これまで主に長野県立歴史館企画展示室で開催してきたが、本年度は十周年記念展以来、7年ぶりに長野県県民文化会館展示室での開催となった。速報展には連日多くの見学者が訪れ、遺跡・遺物に対する関心の高さがうかがわれた。

3　指導・研究会・学習会

期　　日	講　　師		指導内容ほか
10/ 4 / 3	愛知大学	加納俊介講師	松原・榎田遺跡の土器分析
10/ 6 /12	東京都立大学	山田昌久助教授	屋代遺跡出土削り屑について
10/ 7 / 3	明治大学	阿部芳郎助教授	村東山手遺跡出土土器
10/ 9 /29～30			同上
10/ 8 /31～ 9 / 2	北陸学院短期大学	小林正史助教授	弥生土器の使用方法について
11/ 1 / 6 ～ 8			弥生土器の焼成方法について
11/ 2 /15	国立歴史民俗博物館	永嶋正春助教授	屋代遺跡出土漆製品の鑑定

4　刊行物

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書５―松原遺跡弥生・総論」第２、４、６分冊

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書８―村東山手遺跡」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書９―小滝・北の脇・前山田遺跡」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12―榎田遺跡」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書17―佐久市３・小諸市１」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書18―佐久市４・小諸市２」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書20―東部町」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21―上田市・坂城町」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26―屋代遺跡古代」

「長野県埋蔵文化財センター年報15」

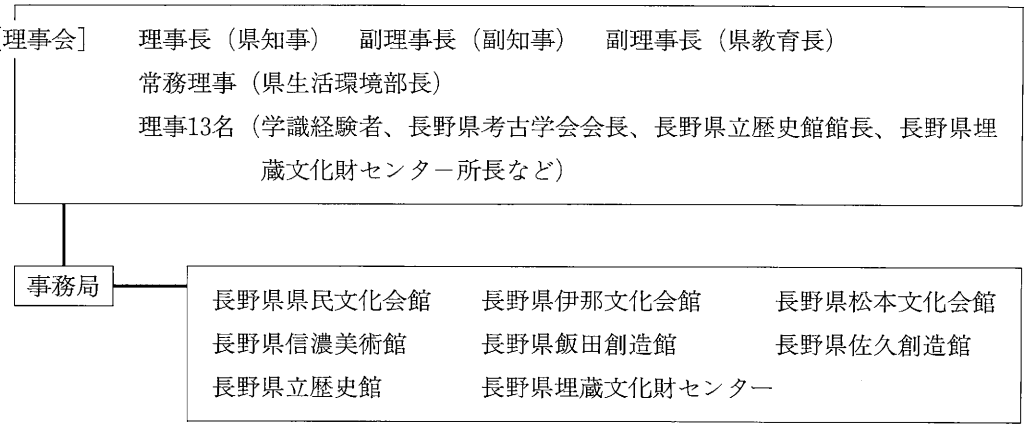
「長野県埋蔵文化財センター紀要７」

III　機構・事業の概要

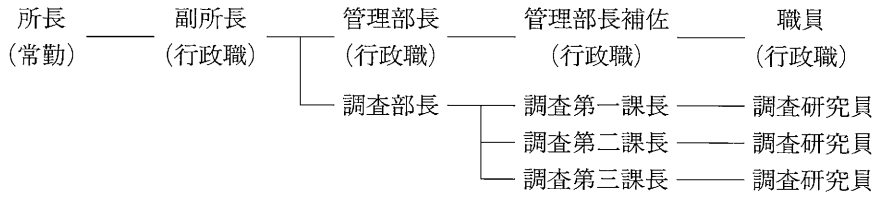
1　機構

(1)　組織

①㈶長野県文化振興事業団組織図



②長野県埋蔵文化財センター組織図



(2)　所在地

更埴市屋代清水260-6

篠ノ井整理棟　長野市篠ノ井布施高田963-4

上田整理棟　上田市下塩尻936-3

2　事業

(1)　清算人会議

第１回清算人会議　平成10年５月25日　会場　長野市　ホテル信濃路

第１号議案　平成９年度事業報告について

第２号議案　平成９年度決算報告について

第２回清算人会議　平成10年７月８日　会場　長野市　ホテル信濃路

議事　清算及び残余財産の処分について

(2) 調査事業

上信越自動車道にかかる埋蔵文化財の発掘調査―長野県教育委員会からの委託。国営アルプスあづみの公園にかかる埋蔵文化財発掘調査―建設省関東地方建設局からの委託。国道 403号線バイパスにかかる埋蔵文化財発掘調査―長野県土木部更埴建設事務所からの委託。県営圃場整備事業芹ガ沢地区・国道 299号付替事業にかかる埋蔵文化財の発掘調査―長野県諏訪地方事務所・茅野市・長野県土木部諏訪建設事務所からの委託。県単農道整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査―長野県佐久地方事務所からの委託。発掘調査技術指導―浅科村からの委託。調査課職員の派遣。

ア　調査遺跡および調査面積

○県営圃場整備事業芹ガ沢地区・国道 299号付替事業関係　茅野市地域内１遺跡15,600㎡

○県単農道整備事業関係　浅科村地域内１遺跡 3,000㎡

○国営アルプスあづみの公園関係　大町市地域内１遺跡 4,300㎡

イ　整理事業

○上信越自動車道関係　佐久市・小諸市・東部町・上田市・坂城町・更埴市・長野市・信濃町内、61遺跡の整理事業

○国道 403号線バイパス関係　更埴市内１遺跡の整理事業

ウ　職員派遣

○飯田市、原村、木曽郡町村会より要請を受け、埋蔵文化財発掘調査関係の業務のため、調査課職員を１名ずつ派遣

(3) 事業費

上信越自動車道関係： 824,601千円、国道403 号線バイパス関係：21,532千円、国営公園関係：46,008千円、圃場整備・国道付替関係： 114,317円、農道関係：13,941千円、発掘調査技術指導関係： 5,246千円

(4) 普及活動 (29ページ参照)

(5) 職員研修

ア　講師招聘および来所による指導・講習会等 (30ページ参照)

イ　奈良国立文化財研究所関係

期日	日数	課　程	参加者
10/ 9 /21～ 9 /25	4	生産遺跡調査課程	鶴田典昭
10/12/17～12/22	4	遺跡地図情報課程	市川桂子

ウ　海外研修

期　日	内　　容	参加者
11・2・27 ～ 3・11	我が国の古代文化の源流となった中国古代文化遺跡の研究 遺跡・博物館等の見学、研究機関等との交流 故宮博物院、周口店遺址、洛陽博物館、兵馬俑博物館、茂陵、陝西省歴史博物館、碑林博物館、半坡遺跡博物館、中国歴史博物館、南京博物館、上海博物館ほか	広田和穂 贄田　明

エ　その他の学会関係研究会・研修会・講演会

期　日	発表者	内　　容
10/ 4 /18	川崎　保	「東アジアを行く縄文装身具」朝日カルチャーセンター
10/ 6 / 5	寺内隆夫	「信濃の古代と屋代遺跡群」木簡学会長野特別研究集会
10/ 6 /20	川崎　保	「千曲川流域の石器石材について」佐久考古学会
10/ 7 / 4	青木一男	「信濃における土器群の画期と交流」庄内式土器研究会
10/10/31	河西克造	「長野県における水田調査の現状と問題点」東日本の水田を考える会
10/11/12	川崎　保	「合成樹脂による土器復元の効果と問題点」花巻北上埋文担当者会
11/ 2 /13～14	青木一男	「長野県の弥生土器編年―北信南部」長野県考古学会98'大会
11/ 3 / 7	寺内隆夫	「考古学からみた八世紀初頭前後の善光寺平」信濃史学会例会
期　日	参加者	内　　容
10/10/12	宮島義和	木簡学会研究集会「７世紀の木簡」
そのほか、各種学会・研究会・シンポジウムなどへの参加多数		

オ　県外博物館・埋文センター・遺跡等視察及び資料調査

期　日	視察・調査他	参加者
10/ 6 /10～12	柏崎市立博物館、下老子笹川遺跡、戸水Ｂ遺跡	青木一男、贄田明、他
10/11/ 7 ～ 8	大阪府文化財調査センター、府立弥生文化博物館	鶴田典昭
10/11/ 1 ～ 2	高崎市周辺の水田跡遺跡群	河西克造
10/11/11～13	秋田県埋蔵文化財センター	大竹憲昭、谷和隆、
そのほか、各地の博物館・研究機関などの視察・調査など多数		

カ　全埋文協などへの参加

期　日	会議名	開催地	参加者
10/ 4 / 3	全埋文協中部北陸ブロック連絡会	石和町	山崎悦雄、小林秀夫
10/ 6 /10～11	第19回全埋文協総会	京都市	佐久間鉄四郎、宮沢弘
10/10/ 1 ～ 2	全埋文協中部北陸ブロック コンピューター等研究委員会	石和町	池田浩之、大竹憲昭
10/10/ 8 ～ 9	全埋文協研修会	ひたちなか市	青木一男、宮沢弘
10/10/22～23	全埋文協中部北陸ブロック連絡協議会	村上市	宮島孝明、百瀬長秀、広瀬昭弘
10/10/29～30	関東甲信越静地区埋蔵文化財担当者会	大洗町	土屋積

キ　県内市町村および関係機関への協力・指導等

期　日	市町村等	協力・指導内容	協力者
10/ 4 / 1 ～11/ 3 /31	国立歴史民俗博物館	歴史民俗博物館特定研究共同研究員	水沢教子
10/ 8 /25	茅野市	鬼場城跡の調査について	河西克造
10/12/ 8 ～ 9	水窪町	高根城跡発掘調査について	河西克造

ク　平成10年度市町村埋蔵文化財担当者発掘技術研修会

―長野県教育委員会・長野県立歴史館と共催

1　日　時　　平成11年２月２日（火）　13時00分～16時10分

2　会　場　　長野県立歴史館講堂

3　内　容　　事例報告「発掘現場等からの普及公開活動について」

①長野県埋蔵文化財センター　　石原州一専門主事

②飯田市教育委員会　　小林正春埋蔵文化財係長

③辰野町教育委員会　　福島永主任

④岡谷市教育委員会　　小坂英文指導主事

講演　　「発掘作業・整理作業における安全管理について」

若林労働安全衛生コンサルタント事務所長

若林茂男氏

4　参加者　152名

ケ　資料貸し出し

期　間	遺　跡	貸し出し資料	貸出先・目的
10/ 6 /25～ 9 /11	松原	縄文中期土器	群馬県立歴史博物館企画展
10/ 9　～11/ 9	郷土	縄文中期土器	長野県立歴史館常設展示
	屋代	鐙瓦、木製品	
	貫ノ木	局部磨製石斧、砥石	
11/ 2 /26～ 3 /28	松原	栗林式土器	安城市歴史博物館特別展
そのほか写真等の貸し出し多数			

コ　同和研修

期　日	講　　師	内　容
11/ 2 /15	綿貫重光（長野県教育委員会同和教育課指導主事）	職員同和教育

平成10年度役員及び職員

理事・所長	佐久間鉄四郎		
副所長	山崎悦雄		
管理部長	山崎悦雄（兼）	調査部長	小林秀夫
管理部長補佐	宮島孝明		
職員	池田浩之（主任）　小岩一雄（主任）　宮沢弘（主事）		
調査課長	百瀬長秀　土屋積　広瀬昭弘		
調査研究員	青木一男　石原州一　市川桂子　市川隆之　伊藤友久　上田典男 上田　真　宇賀神誠司　臼居直之　臼田広之　大竹憲昭　河西克造 川崎　保　桜井秀雄　澤谷昌英　田中正治郎　谷　和隆　田村　彬 鶴田典昭　寺内隆夫　徳永哲秀　鳥羽英継　贄田　明　西　香子 西嶋　力　西山克己　広田和穂　藤原直人　町田勝則　水沢教子 宮島義和　柳沢　亮　若林　卓		
調査員	中島英子　西嶋洋子　平出潤一郎　山崎まゆみ		

長野県埋蔵文化財センター年報15　1998

発 行 日　平成11年3月31日
編集発行　㈶長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒387-0007　更埴市屋代清水260－6
TEL　026－274－3891
印　　刷　信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037　長野市西和田470
TEL　026－243－2105